

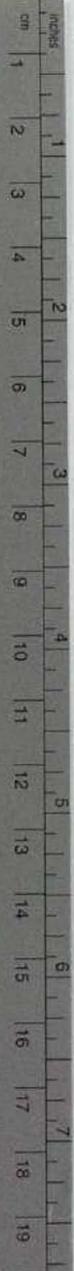
Z32-B88



號六第

卷七第

販發日一月六日四十正大 本精選作廿九月五日四十三大 (刊發日一月六日) 可認者復都得三十九日三十月六日一个正大



Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

Magenta

White

3/Color

Black

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

© Kodak 2007 TM Kodak

カルピスは味のオーケストラ!!

一杯のむご

舌がダンスを始めます。

顧問 三宅猿一 理學博士  
販賣所・酒店・食料品店・樂店



滋強飲料

# スピルカ

## 日本一の画嘶

巖谷 小波 著

(岡野榮、小林繪吉、杉浦非水畫)  
四六半裁全廿五冊 定價各金廿五錢 送料各四錢

ひらがな文 桃太郎 浦島 舌切雀 猛蟹合戦 文福茶釜 勝々  
山 花咲爺 一寸法師 魔取 カタカナ文 牛若丸 曾我兄弟  
楠公 清正 爲朝 天神 龍宮メグリ 山メグリ 車舟  
馬ノ稽古 水アソビ 軽業 猿 熊鼠 牛 象ノ遊ビ 鳥メガ  
サガナノ藝術ノクシ 家鷹ト鷺 鷹ノ世界 兎ノ世界 蟻ノ世界

動物園 兵隊ゴッコ 海軍の二通あります。

お子様たちのお相手なしに、面白いお嘶が次々と書か  
と一緒に躍りだす、それはうれしいお本です。

巖谷 小波 著 (文部省認定圖書)

## オトギウタ工

第一卷より第三卷まで 四六倍判全三冊

定價各一冊金八拾錢

送料各金八錢

鹿島鳴秋 著 (文部省認定圖書)

四六倍判全五冊 定價各金壹圓 送料各八錢

第一卷 俵忠助 クリィー坊主 熊猫 鮎公戰 二十課まで

第二卷 舟ノ芝居 遠足 オ花ノ洗濯 夜汽車の木郎 二十課まで

第三卷 泳ギノ名人 ニタマレ鳥 留守ノ家 緋タフオ四太郎  
外二十課まで

第四卷 福引かる大會 美六 夢の國 外二十課まで

第五卷 鳥と太郎 父ノ類 トンダ番人 姥な發物 外二十課まで

## オハナシ

このオハナシは都下有数の私立小學校の輔助教科書として採用されて居ります。

社会式株善丸

東京・日本橋通 札幌・仙台・横濱・福岡・名古屋・大阪

ルビ丸・田三・田神・京

(一)

東京高等師範學校訓導 飯田恒作先生著

新刊 最

**兒童創作 繼方の新指導**

意 慮 の 發達

▲定 價 金 參圓 參拾錢

▲送 料 金 拾貳錢

約四六版布  
約四五〇頁製

本書は高等師範の飯田先生が、兒童の綴る力を縦に眺めて兒童のありのまゝに伸び行くすがたを苦心研究せられたものである。「縦の眺め方をするには一つのまとまりをつけるにも六箇年間はかかる。更にその確實さを證據だてるには十二箇年乃至十八箇年の星霜を経なければならぬ」と先生は言つて居られる。實に本書は、先生の涙ぐましいほど敬虔なる體験から産れた尊い足跡である。

館 風 培

京七 東一 替二 振三 区六 田神一 京町 東錦

(四十)金

文藝雜誌

婦友之姉

主  
花の週間 北原白秋  
お梅久米之助 加藤武雄  
姫と三人の男 生川未明  
ひワシイイナゲ 室生翠星  
娘なげ 南部修二郎  
愛士 落谷虹兒  
黄土 落谷虹兒  
約花 定一 北村壽夫  
朝の數 中川紀元  
小花 木崎三  
曲五 生田千代子  
東川勉  
西川勉  
東山春月  
北川千代子  
中山晋平  
竹久夢二  
野口雨情  
花く 沖野岩三郎  
野口雨情  
は書

文  
藝  
雜  
誌  
片  
五  
東  
西  
北  
中  
竹  
野  
花

作  
文  
藝  
雜  
誌  
片  
五  
東  
西  
北  
中  
竹  
野  
花

目  
第  
一  
創  
刊  
號  
6  
号  
月  
日  
落  
谷  
虹  
兒  
監  
輯

本誌は 現代の若き女性にむくる  
唯一つの文藝雑誌である  
創刊號五月十日發行

懸賞募集

小説、短歌、詩、手稿十五枚以内  
短文、小曲、民謡、童謡、  
(原稿紙二十字詰一枚)  
(用紙ハカキ)  
(原稿紙二十字詰一枚)  
(原稿紙二十字詰一枚)  
(原稿紙二十字詰一枚)  
(原稿紙二十字詰一枚)  
(原稿紙二十字詰一枚)

五銭一郵  
郵一冊一價定

番三四六〇七京東普振 社友之姉 町工大堅区田神市京東

沖野岩三郎著 (最新刊)

(最新刊)

# 黒船物語

★★★★  
數ある沖野先生の著書中最も心血を注がれた長篇童話の  
盛り神境に入らんとする齋田畫伯の挿畫と並んで機に兒童讀書界の

# 地獄の門

山村暮鳥童話集

(最新刊) 四六判一七六頁  
定價一圓六十紙  
送料(郵資)十二錢

▶ 賣、發、愈 ◀

# 世界偉人物

遠藤 早泉著

(最新刊) 四六判三一三頁  
定價二圓二十仙

世界童話  
叢書第二篇  
**支那童話集**

小泉一雄先生編・小糸源太郎畫伯裝幀

四本插定送  
六本畫價金壹圓壹錢  
六冊畫價金壹圓壹錢  
六冊畫價金壹圓壹錢

支那の童話には、特別な面白味があります。支那の童話でなくては讀めない面白味のある實に立派なものであります。世界のどんな國の童話と比べても、決して劣らない立派な藝術的な物語りです。

この集に収めた十二篇の童話は、いづれも餘り世間に紹介されてゐないもので、しかも一粒選りの面白いものばかりです。編者の小泉一雄先生は、東洋の童話研究家として世界に知られてゐる文豪小泉八雲（ラフカヂオ・ヘルン）先生の息子さんです。父八雲先生の遺業を次いで、苦心の結果に成ったのが本書でありますから、如何に本書が日本童話界に貴重な著述であるかと知られませう。尙ほ裝幀は小糸源太郎書伯が、熱心な技をふるはれたものだけに、誇るに足る立派なものであります。是非御高讀を願ひます。

世界童話集 第二編 印度童話集 新刊 定價金壹圓五十錢  
世界の國々の童話の中で、最も深遠の意味がある印度の童話を、興味深く書いた本書は、支那童話集に次いで多大の御賞讃を得ること、存じます。  
送料十二錢

番一〇七六七草淺口座東京駒込市外東京上八八二巢駅入

## 目 次

い！（表紙・原色版）……………寺内萬治郎

蔭（口繪・三色版）……………岡本歸一

男（口繪・一色版）……………寺内萬治郎

まらない……………（二）本居長世

とほせんぼ……………（六）久米正雄

おい泥棒さん……………（四）野口雨情

ルオンと涼也……………（五）沖野岩三郎

晴・橙・嘆……………（三）三井信衛

れ……………（三）大木雄三

色……………（三）若山牧水

小鳥の嫁入り……………（三）早田稔夫

狐の嫁入り……………（三）野口雨情選

小鳥は空に……………（三）加藤武雄

ベルベットボート……………（六）藤川萬夫譯

まらない雷……………（六）吉田一穂

月少小女……………（六）森星兒

竹ノワールの不平……………（三）久米舷一

月少小女……………（三）長崎五六

かねつき來……………（三）若山牧水選

ノワールの不平……………（三）久米舷一

月少小女……………（三）長崎五六

かねつき來……………（三）若山牧水選

月少小女……………（三）長崎五六

かねつき來……………（三）若山牧水選

月少小女……………（三）長崎五六

かねつき來……………（三）若山牧水選



挿

兒童劇

## 舌切雀

（五幕）

寺内萬治郎・水島爾保布  
岡本歸一・石川爾保布  
寬吉

畫

（特別附錄）

出讀者

出版者

だだ

よ

り

り

り

り

り

り

り

り

り

り

り

り

り

り

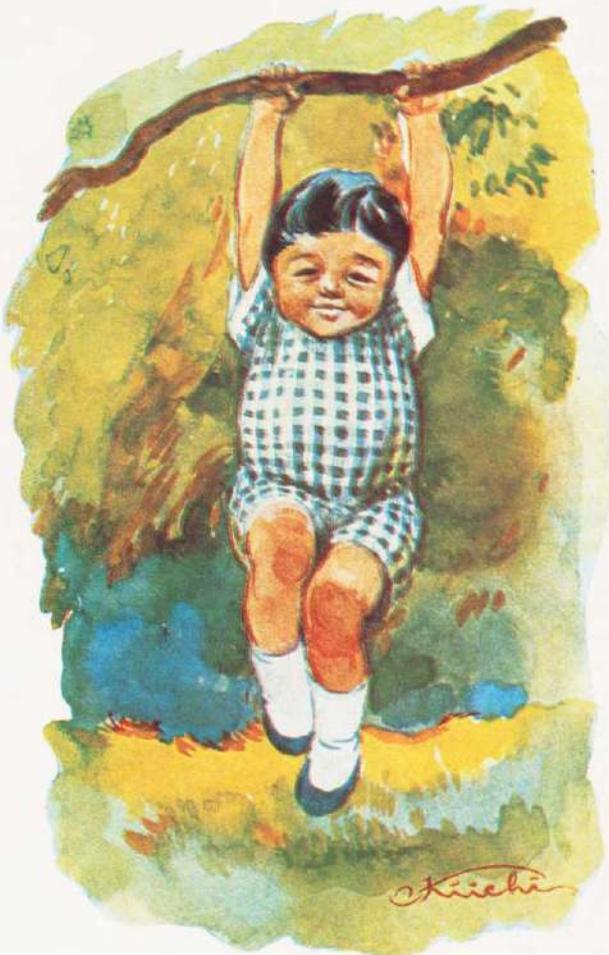
り

り

り

り





木

蔭

(金の星畫譜)

岡本歸一畫

男

大



（第七二頁の「ノワルの不平」を御覧下さい。）

寺内治郎画

## 版再忽

主人公・パリンヌの涙の一一生  
ローマ三井信譯作

# 家なき娘

四六判箱入美本・本文三六〇頁・定價金壹圓九拾錢・送料十二錢

原著は佛國文豪マーローの作であつて、歐米諸國の家庭に姉妹篇「家なき子」と共にこれ程廣く  
讀まれた本はないといふはれてゐる世界的傑作であります。我が國にも早くからその名は知られて  
おりましたが、原著が手に入らない爲めに、遂に紹介される機會がなかつたものです。幸にして  
三井信衛先生の手によつて、本書は完全に翻譯され、わが社より出版の運びとなりました。  
是非圖書館並に家庭に本書を備へてこの世界的名著を遍く我が國の少年少女に紹介したいと存じます。  
『金の星』の愛讀者の皆様! 是非本書を一度お読み下さいまし。あはれな主人公バリンヌが、如何にして自分の運命に泣き、また運命に戦つたか、本篇は涙なしには讀め  
ないと共に、この主人公の雄々しい決心は必ず皆様に深い感激を與へる事でせう。尚ほ  
製本の美しさは、日本にも珍しいものと誇つてゐます。

東動坂京市本町五九區五五番六口振替九九

# 天下の青年は 何故に争ふて 大日本國民中學會に入會する平——

講義が新しいから

会費が廉いから

指導が良いから

學制が正しいから

基礎が固いから

講師が善いから

卒業が早いから

成功が慥だから

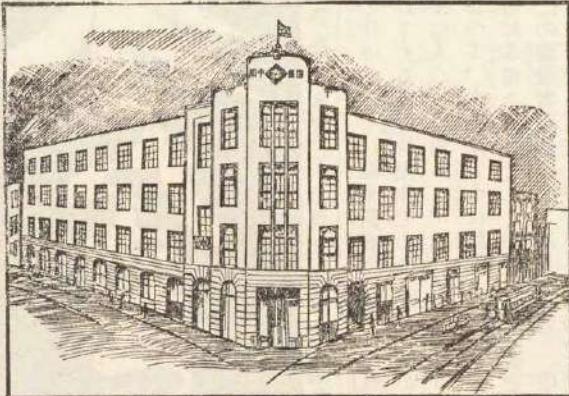
會長 尾崎行雄

學監 文學博士 山達麻

顧問 新渡戸博士 山内繁隆

岡田文部大臣 淳田博士

——チリソーオの授業世界の通信教育



(景全新會本館一帝興復の都所事務新會全體)

立身成功の基礎

現代の活社會に、名を成さんとするには必ず中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競争の勝利者たることは六ヶしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずして中學卒業同様の學問をする方法がチャンと出来てゐる。創立以來二十三年といふ古い経験のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法がそれである。

## ○創立廿二年 創立は一番古くいて 中學講義錄

内容は一番新しくて 中學講義錄

東京神田築河臺（お茶の水電車通り）  
大日本國民中學會

電話 大手五五七七△電話 神田三〇〇〇三

四二〇〇

講義錄見本つき

# ごも旧約聖書物語

四六判箱入美本  
本文一八〇頁  
插畫三色版外數頁  
定價金九十錢  
送料十二錢

世界少年少女名著大系 (16) 金の星社編・菱原寺内萬治郎画伯

本書は、「バイブル物語」とも呼ばれ、歐米各國の少年少女は、誰でも幼いうちから母親に幾度となく話され、又大きくなつて文字の讀めるやうになつてからも、何十度となく繰返し、讀む程に、興味の深い物語りであります。丁度日本の「古事記物語」のやうなお話で、ユダヤの國の古い／＼お話を古いお話をだけにそれは／＼面白いのです。信仰深いアブラハム、イサクの嫁えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷など、神様と人間とのいろいろの不可思議な出来事を書いたものです。日本の少年少女が、お読みになつたら、又一層の面白味があることでせう。是非御一讀下さい。

九五三町坂動郷本京東  
社星の金  
番六九五九五京東替振

## 系大著名女少年少界世

錢二十金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

金の星社の名著大系は少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最も面白く、又最も解りやすく、しかも、クロース製本箱入りの非常に立派な本を、他に例のない安い定價で發賣するので、熱烈な歡迎を受け、増版又増版の有様です。皆さまの愛讀書として是非お揃へ下さい。

## ロビンソン漂流記

## ナボレオン物語

## ドン・キホーテ

## コロンブス物語

## ガリバーアー旅行記

## ロビンフッド物語

## アラビヤンナイト

大人國小人國めぐり

星の金社  
星編

## 系大著名女少年少界世

錢二十金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編九第

編八第

編七第

編六第

編五第

編三第

編二第

第一編

## シェークスピヤ物語

## オデッセー物語

ギリシャ神話

ガリバーアーが、難船して小人國に漂流して、奇想天外の滑稽をやり、再び航海に出で大人國に漂流し、そこへさんざんな目にあひ、漸く鬱にさらはれて、本国に歸つて来るまで實に面白い物語りです。

英國に傳へられた有名な物語りです。もと伯爵であつたロビンフッドが悪い男のために國を奪られて、遂に義賊となつて、シナーウッドの森にかくれ、王を救ふ戦を起したり、悪い僧正をやつつけたり、そして最後に毒殺されるまでの變化の多い物語りです。

アラビアンナイト程面白い物語りは、世界の童話文學を通じないといはれてあります。千年餘の間も語り傳へられた語りである事な考へても、如何にこの物語りが讀者に興味を與へてゐるかわかります。

アラビアン・ナイトの中でも、特に面白いのはかりが集つてゐます。

有名なシェークスピアの芝居の中で、面白いものはかりを選んで、物語り風に書いたものです。『アントン・ヘスト』『御意のまゝ』『エニスの商人』『がみ』『女馴し』『浪夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は読んで置くべき物語りです。

# 星の金社編 大著名女少年少界世系

錢二十金料送・錢十九金冊各價定・本美入箱判六四

編九十第

編八十第

編七十第

編六十第

編五十第

アンデルセン童話

ギリシャ英雄物語

奴隸トム

こども聖書物語

ローマ英雄物語

# 星の金社編 大著名女少年少界世系

錢二十金料送・錢十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

編四十第

編三十第

編二十第

編一十第

編第十第

神話日本古事記物語

子供キリスト傳

新約物語

西遊記

繪入イソツブ物語

グリム童話

近刊

近刊

ローマの英雄たちの歴史を書いたもので、ヨーロッパの英雄物語の中でも最も有名な物語です。この物語は、ローマの英雄たちの冒險と戦争、そして神々との対話を中心に構成されています。

「バイブル物語」とも呼ばれる、歐米各国の少年少女が、幾度となく繰り返し読む権利有名なお話です。ローマを敵討かれたローマの英雄たちの冒險と戦争、そして神々との対話を中心に構成されています。

「新約物語」と一緒に読んだら、聖書のことがわかつて面白味が深くなります。

白人種のために犬猫同様にあつかはれていた奴隸の涙の物語です。偉人シンコーンが現れるまで、米國のあれは奴隸たちの生活を書いたものです。最初の貢から最後の貢まで涙なしに讀めねどんなに養はれることがあります。博大、崇高な気持ちが、この本によつて面白味が深くなっています。

「古事記物語」ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの国にもあります。実際驚く程立派な、面白い物語です。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大国主の命の話や、それからずっと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

二千年后の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあられた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

支那から印度へ、はるかお經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々な魔難に出遭ふ奇遇日々の物語。一度読み出したら本を置き難い世界的名作。この本を讀まない者は不幸であります。

「カリムの童話」は改めて述べるまでもなくドイツの名傳説研究家カリム兄弟の作つたもので、各篇とも少し、カリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、かなり少女の珍重として贈はれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中にも有名な面白いものばかりである。カリムの童話は改めて述べるまでもなくドイツの名傳説研究家カリム兄弟の作つたもので、各篇とも少し、カリムの童話は今ではドイツ一國のものでなく、かなり少女の珍重として贈はれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中にも有名な面白いものばかりである。

金の星童謡曲譜第九輯

# あのかの町の町

中山晋平先生作曲  
野口雨情先生作謡  
竹久夢二先生裝畫



東京市本郷動坂町三五九  
電話小石川五九五八七番  
（振替東京五九五八七番）

金の星社

父様の船は歸らず  
今日もまた瀆邊に出たが  
何としよう

風和いで  
たゞ恨めしい  
海の色よ  
何故答へない  
この聲に

（概梗）  
沖野岩三郎先生の一大傑作『父戀』は大震災に原版を焼失し、久しく品切れになつてをりましたが、皆様の熱望止み難く、日々大多數のお申込みがありますので、此處に第八版を發賣する事となりました。長い間熱望されて未だお手に入らなかつた方は、この際大至急にお申込み下さい。部數に限りがありますから、近日中に又も品切れになる恐れがあります。

紀州の遠邊に伊吹子と明治といふ娘と弟がありました。二人のお父様は漁師でしたが、或日、新しい船を造つて海へ出まゝ家へ歸つて来ませんでした。後に残された母と子はどうなに悲しんだ事でせう。併し、近所には親切な漁師達がゐました。その人達と共に、娘弟は雄々しくもあらゆる困難と戰つて、父の行方を尋ねます。そして最後に、満洲まで行つて父にめぐり合ふといふ、長と短りの一大長篇であります。

番番七八三五川石小話電替  
一五九五九五京東振

責版八



外市京東一五三端田  
金の星社

# 星の金

號月六

(通卷第六拾七號)



⑦

# 金の星童謡曲譜集

代表する好大なる評の本作童謡曲界を

一輯二編、三編以降各下金十八銭、各上金十六銭、料送金六銭。

第一輯 人	買	本居長世作曲・野口雨情作謡	人買船、青い目の人形、九官鳥、日
第二輯 一 つ お 星 さ ん	船	本居長世作曲・野口雨情作謡	一つお星さん、七つの子、鶴と雀、象、錦る燕、十五夜お月さん
第三輯 青	(目曲)	本居長世作曲・野口雨情作謡	青い空、燕、雨後の傘、でん／＼雀、鳩さん、象の鼻、四丁目の犬
第四輯 赤	空	本居長世作曲・野口雨情作謡	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、雀の酒盛り、呼子鳥
第五輯 夢	靴	小松耕輔作曲・野口雨情作謡	夢とり、おしゃれ娘、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機縫り
第六輯 子	(目曲)	本居長世作曲・野口雨情作謡	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、鶴柱、慈坊主、藪の下道
第七輯 お 人 形 さ ん の 夢	唄	(目曲)	お人形さんの夢、鉤鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穗、お馬のお耳、草遊び、雀柱
第八輯 べ ん べ ん	鳥	(目曲)	べん／＼鳥、登のお使、仔牛、赤い小鳥車、紅葉銷粉、さみだれ

番六九番九五番七八五三五川石小話東替振電  
番六九番九五番七八五三五川石小話東替振電  
社大白眉實棚市外八六市四京黑目東下  
區鄉本市京東九五三町坂動

つまらない

作曲 本居長世  
作謡 野口雨情

A musical score for piano and voice. The top system shows a piano part with a dynamic of *mp* and a vocal part with lyrics "しづかに遊びして". The bottom system shows a piano part with a dynamic of *mf* and a vocal part with lyrics "よろがなくから よくろはくらも". The music consists of two staves with various notes and rests.

D

よるになるる  
めがみる  
ボーボー  
ボーボー

*mf*

でんきがくらくてつまらな  
わたしはくらくらやめがみる  
*mf*

いの ごほんと よむ一にも  
ね おはなし でき一ない

*rif.*

よきれな  
つさらな  
い

*rif.*

# とほせんぼ

野口雨情

四

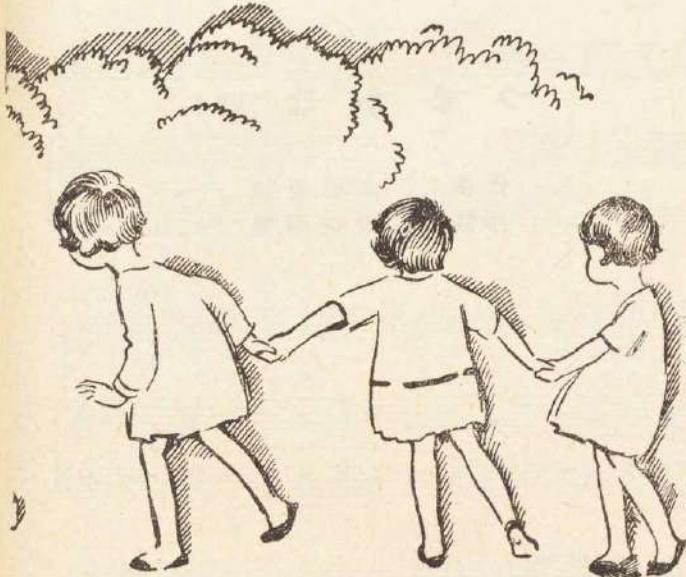
スツタ／＼スツタ／＼  
急ぎのお使ひ　急ぎのお使ひ  
とほせんぼ　とほせんぼ  
御門の扉が開きません

スツタ／＼スツタ／＼  
通して下さい　通して下さい

とほせんぼ　とほせんぼ

扉が重くて開きません。

スツタ／＼スツタ／＼  
御用が遅れる　御用が遅れる  
とほせんぼ　とほせんぼ  
御門のないところ通りなさい  
スツタ／＼スツタ／＼  
急ぎのお使ひ　急ぎのお使ひ  
とほせんぼ　とほせんぼ  
御門の扉が開きません。



kiichi

# おいどろきさん

久正米雄



遊んでをります。』と訴へて來た者がありました。

役人は大喜びで、早速そのスカルホルトを縛つて王様の御前へ連れて來ました。王様は、

『これへ、その方は牧場から羊と山羊とを盜み出したらうな。』とお調べになりましたが、スカルホルトは、『私は貧乏こそ致せ、盗みを致した事はございません。』

『では、どうして子の牧場の羊や山羊がその方の處へ行つてゐるのであるか。』

『どうしてだか存じませんが、知らない間に來てるるのでござります。で、神様が私共夫婦の正直なのをお喜びになつて、下さるのだと存じまして、有り難く頂戴致してをりました。』

『嘘を吐け。——どうだ、確に盗んだのであらう。正直に申せ。』

『いいえ、決して盗んだのではございません。』

『強情な奴だ。拷問にかけて白状させろ。』

可哀想にスカルホルトが今將に痛い目に逢はされようとした時でした。突然王様の御前へ、ドブ鼠のやうな色の着物を着た小人が一人現れ出て、『王様の羊や山羊を盗んだのはスカルホルトではありません。私でございます。』

『ナニ、その方が盗んだと?』

『ハイ、私が盗みました。』

『不届な奴ちや。どうして盗み出した? さうして又、どうしてスカルホルトの處へやつたのちや?』

『スカルホルトは村でも評判な正直者でございます。その上毎日田畠へ出でては一生懸命に働いております。それでながら、いつでも貧乏と云つてあの位貧乏な人間はござりますまい。食べるものがなくて、一週間位水ばかり飲んで暮してゐる事も珍しくない位でございます。見てゐて氣の毒で堪りません。ところが、それに引き替へて、王様の牧場には、何百何千と云ふ羊や山羊が飼はれてをります。この

七百年ばかり前のお話。氷の島と云ふ寒い寒い北の國に、王様が入らつしやいました。廣い廣い牧場に、澤山の羊や山羊を飼つて入らつしやいましたが、近頃になつて、一週間目一週間目に必ず一匹づつ、羊と山羊とを代りばんこに盗まれました。而もいゝのからいのからと盗まれるので、牧場の番人は困つてしまひました。で、早速王様へ、『どうか寝すの番をおふやし下さい。』とお願ひ致しました。併し幾ら寝すの番をふやして目を皿のやうにして一晩中番をしてゐても、一週間目になると、知らぬ間にそつくり盗まれてゐるのでした。これには王様も、ほとく困り果てておしまひになりました。すると、或村から、『私の村のスカルホルトと云ふ貧乏人の家に、王様の牧場でなければゐさうもない位立派な羊や山羊がありま

うちから、一週間に一匹づつ位ゐなくなつたつて、王様の召し上り物にお困りになるやうな事はござりますまい。そこで、私が盗み出してスカルホルトにやつてをりました。全くスカルホルトの知つた事ではございません。どうかスカルホルトを許して、私はお處刑なさつて下さい。灰色の小人は悪びれもせずにかう云ひました。王様は、小人の大膽な云ひ振に、雷に打たれたやうに驚かれましたが、やがて、『フン、あれだけ嚴重にしてある番人の目を掠め度々盗み出したところを見ると、お前は餘程優れた腕前を持つてゐると見える。よし、では明日、わたしの大車の黒牛を、十分に番人を附けて牧場へ出でから、途中で盗んで見い。首尾よく盗めたら、これまでの罪は許してやる。』

「陛下。」小人は一禮して、『そんな事はとても出来事ではございません。眞晝間大勢の番人の目を掠めるなんて云ふ事は出来っこございません。』



## 二

翌朝早く、太陽の光がさして來ると一緒に、小人はスカルホルトから牛の羈綱を借り受けると、急いで家を出て森の中へ這入つて行きました。そこは、いつも王様の牛飼が牛に草を飼ふために通る道筋でした。そこの一目に見える大きな櫻の木を選んで、小人は中でも一番太い枝に羈綱をハラリと引ッ掛け、ダラリと自分で自分の頸を縛めて下りました。勿論本當に首を縛つたのではありません。

すると間もなく、一人の牛飼が黒い大牛を引いて、こゝを通りかゝりました。と一人が、  
「おやつ、こゝに羊泥棒がゐるぜ、ハハア、とても俺達が番をして行く牛は盜めないと諦めて、どうせ王様に殺されるんならと云ふので、自分でお死に遊ばしたんだな。——おい、お泥棒さん、おさらばだ。かうなつては、もう王様の黒牛も盜めないなあ。」

「出来なければ、罰として絞殺されるばかりぢや。」  
小人が尙も何か云はうとするのを、王様は手を振つて「行け！」と指圖をなさいました。  
で、小人は外へ出ましたが、するとスカルホルトは喜んで、小人を自分の家へ連れて行つて、夫婦で何遍もくお禮を云つては大事に歓待しました。

かう云つて、二人はそのまま行き過ぎてしまひました。その姿が見えなくなるや否や、小人はスルスルと樹から降りて来るが早いが、森の中を抜け道して二人の先廻りをして、又しても道端の大木に縛れ死んだ眞似をしてゐました。これを見た一人の牛飼は、どんなにびっくりした事でせう。

「ありや一體誰だらう。おや、俺の日の迷ひかな。ウン、確にこりやアあの小人だ。不思議だな。」と二人が云へば、「馬鹿云ひなさんな。一人の人間が、二ヶ所で死ねるのかどうか者へ見るがいゝ。こりや別の人間さ。」

「いゝえ、同じ小人だよ。俺は確にこの灰色の着物と、歯を剥き出してゐるところに見覚えがある。」

「ちやあゲンマンしよう。確に違つた人間だから。」

『よオし。』

そこで二人は牛の傍の樹に縛り附けて置いて、確めに素來た道を引つ返して行きました。トソトと二

人の駆けて行つたのを見すまして、小人はヒラリと樹から飛び降りるが早いが、急いで牛の網を解いてスカルホルトの家へ連れて来てしまひました。

『萬歳。』

これで恩人が殺されずに済むと思つたので、スカルホルトと妻とは大喜びで小人を迎へました。

牛飼の方は、夕方になつて項垂れてスゴ／＼御殿へ歸つて來たので、王様は一目御覧になるなり。ハア、こりやまんまと一杯食はされたな」とすぐ見てお取りになりました。そこで早速人をやつて小人をお迎へになりますと、小人は晴々さうな顔色をしてやつて來ました。

『うまくと黒牛を盗みをつたな。』

『ハイ陛下。私は唯御命令に従つたばかりでござります。』

『よし。』さあ、こゝに金貨で五十圓ある。これで黒牛を買ひ戻したぞ。——ところでと、もう一つ井裏に隠れて待つてゐました。

すると間もなく、十一時の鐘が鳴つて、王様と王妃様とが這入つて入らつしやいました。

『陛下。お先へ御免遊ばせ。』

こう挨拶をなさつて、ランプをお消しになつてから、王妃様が先に寝臺の上に横におなりにならうとなさいましたが、忽ち、

『あれエ。』とお叫びになりながら、顔の色をお變へになつて部屋の隅に立ち竦んでおしまひになりました。

かう挨拶をなさつて、ランプをお消しになつてから、王妃様が先に寝臺の上に横におなりにならうとなさいましたが、忽ち、

『まあ、びっくりするぢやないか。一體どうしたと云ふのです。』と王様がお尋ねになると、

『お蒲團の中へお這入り遊ばしてはイケません。何

お前に云ひ附けがある。今夜と明日の晩の二晩のうちに、余の寝臺のシーツを盗み出して見い。』

『陛下、どうぞさう云ふ事を私にお求め下さいま

すな。宮殿は番兵が非常に嚴重に守つてをりまして、私如き賤しい者は、御門の傍にも寄り附けません。』

『さうか。出来なければ、お前の命がないばかりぢや。』

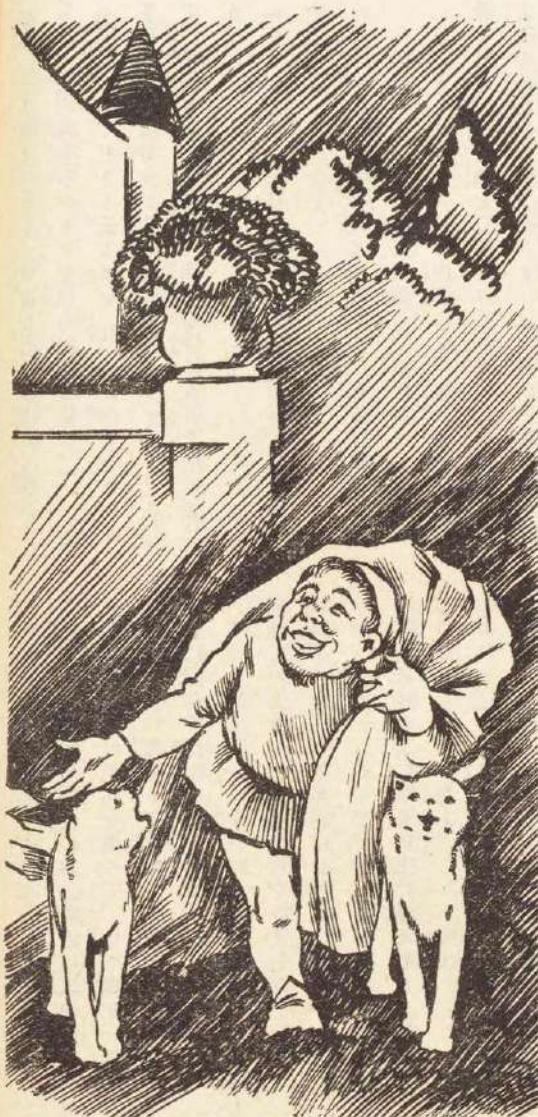
仕方がなしに、小人は引き下つて來ました。

その夜、彼は長い丈夫な繩とバスクエットとを用意して、バスクエットの内側には、柔い苔草を一杯敷き詰め、中へ猫を二匹入れて、音のしないやうに宮殿の近くまで忍び寄りました。狙ひを定めてバツと繩を投げると、ハラリと屋根の尖りへ引ッ掛つたので、それを手縛つて小人は首と屋根裏の部屋へ忍び入り、ポケットから小さな鉢を取り出して、忽ちのうちに床に穴を開けたかと思ふと、そこから

か柔らかいものが私の足に觸りました。』

『ハ、ハ、ハ。蒲團の中へ化物でもあると云ふのか  
い。女と云ふものは本當に兎のやうに臆病で、馬鹿、  
氣であるね。』王様はかう仰しやりながら、英雄の

やうに落着き拂つてお蒲團の中へお這入りになりま  
したが、これもまた、『あ、とお呼びになつて飛  
び上られました。見ると、猫が肺に爪を立てゝゐ  
ました。』



お二人の悲鳴を聞きつけて、夜の番兵が駆けつけ  
て来るなり、戸でドアを三度コツコツと叩いて、お  
力添が必要かどうかを伺ひました。その時になつて、  
俄に王様は御自分の弱蟲であつた事が羞しく、

『静かに。』と、いかめしく仰しゃいました。そこで、  
番兵は安心をしてドアを離れました。

その暇に、王様は急いでランプを點して寝臺に近  
寄つて御覽になると、いつの間にか猫はそこに戻つ  
て、舌で毛並を揃へてゐました。

『成程、相手が動物では禮儀を辨へないのも無理は  
ない。王冠を敬ふ事を知らないのだ。併し國王の寝  
臺を棲家にするとは不心得千萬な奴ぢや。待つてゐ  
るがい。余等一人をびっくりさせてくれた禮を多  
分にしてやるぞ。』

『陛下、おまし遊ばせ。喰まれるとイケません。』  
『ナーニ、心配せんでもよろしい。』

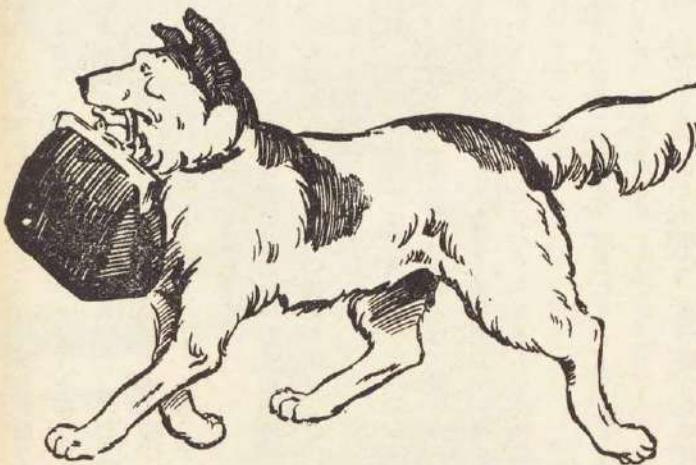
かう仰しやりながら王様は、先づ御自分の寝臺の

上のシーツの四隅を持つて中へ猫を包んだまゝ、怒  
をあけて下へお捨てになりました。それから、王妃  
様の寝臺の上の猫をも、同じやうにシーツに包んで  
捨てゝおしまひになりました。

『さあ、寝よう。』

お二人は、ぐつすりお寝みになりました。その暇  
に、小人は天井から抜け出て、繩をつたつて地面の  
上に降り、王様のシーツを拾つて歸りました。  
翌る朝、王様が目をお醒しになると、小人がシ  
ツを肩にしてニコニコ笑つて立つてゐました。  
『ホイ、また一杯嵌められたか。——サテ——お前  
は本當に利口者ぢやな。よし——余の云ひ附けを  
二つとも成し遂げた功によつて、これまでの罪は許  
してやらう。永く正直者のスカルホルトを助けてや  
つておくれ、よしよし。』

王様は大變な御機嫌でした。



## 也涼とンオル

郎 岩 沖 三

旅から歸つたお父さんは、風呂敷に  
包んだ大きな箱を膝の上に載つけて、  
偉に乗つてゐました。

玄關の所へ出迎へた涼也は、其の箱

を見ると、直ぐ、それはきっと自分に  
下さるお土産だと思つたので、

「お父さま、それは何ですか?」とき  
ました。すると、お父さんは偉の上か

ら、「何だらう? この箱にきいてごらん。  
お返事をしますよ。」と言つて笑つてゐ

ました。

「その箱がお返事をするの?」

涼也は、まさかといふやうに、お父  
さまの顔を見あげました。其時そばに

立つてゐた偉夫さんも、にこく笑ひ  
ました。

「何だらう? この箱にきいてごらん。  
お返事をしますよ。」と言つて笑つてゐ

ました。

「それはね、ヘンリイさんの所へ貰つて來たんだよ。  
きつと涼ちゃんが喜ぶだらうと思つて。」

お父さんは涼也の嬉しさうな顔を見て、さも満足

さうに笑ひました。

「名前は? 此のエノコロの名前は何といふの?」

涼也は仔犬を、そつと内庭の上におろしながら問  
ひました。

「ヘンリイさんに貰ふ時、名無しだつたのだが、お  
父さんは偉の上で考へたんだ。そして、ルオンと名

をつけたよ。ルオンと……」

「あ、ルオンか。いゝネ。ルオンつて呼び好い名だ  
ワ。」

涼也は裏の方へ歩いて行かうとするルオンの尻尾  
を掴んで引戻したので、ルオンは痛いから堪忍して

頂戴といふやうに、きやん! と小さい聲で一聲泣き

「本當ですよ。坊ちゃん。拳骨で軽く其の箱をた  
いてごらん。箱の中からきつと、お返事があります  
よ。」と申しました。

「わかつた。大きなお人形だな。」

涼也は姫しいやうな氣味の悪いやうな顔をしながら  
、高々指で可愛い拳骨をこしらへて、お父さまの

膝の上にある箱を、こつり! とたいてみました。

すると、箱の中からクン、クンと鼻を鳴らすやうな  
小い聲が聞えて來ました。

「あ、うれしい。エノコロだ。犬の仔だ。」

涼也はいきなり其の箱を抱へて玄關の所へ擔いで  
來ました。

「さうだよ。可愛い仔犬だよ。」と云ひながら、お父  
さまが偉を降りて玄關へ入つて來た時、もう涼也は

可愛い可愛い、むくく肥えた犬の仔を抱きしめて  
ゐました。

「お父さま、このエノコロ、何所で貰つて來たの?」

ました。それはルオンが涼也の老家へ来て、一番最初の泣聲でした。

お父さまも、お母アさまも、涼也も、ルオンを大

事に大事に育てました。廿日卅日と經つうちに、ルオンは驚く程大きくなつて、近所の人達からも、い

い犬だ、いゝ犬だと云つて賞められました。

涼也のお父様は兵也といふ名で、町の名高いお醫

者さんでしたから、毎日正午頃から晩方まで往診に

出て、何軒も何軒も患者の家を巡ります。で、兵也が車に乗つて走る時、ルオンは主人のカバンを口に銜へて一緒に走ります。そして患者の家に行つて、

兵也が病入を診察してゐる間、ルオンは主人の脱揃衣もを坐つてゐる。若しも他人が、間違つて其の靴に手を觸れ

でもしようものなら、直ぐウーッと唸つて、

『それは自分の主人兵也様のお靴だぞ!』と言ふ事

を知らせます。

涼也が、お友達と一緒に水泳ぎに行きますと、ルオンは直ぐに跟いて来ます。そして、川原に脱ぎ棄てた着物の傍に坐つて、いつまでも其の番をしてゐます。

兵也がお家で診察してゐる間、涼也が小學校で勉強してゐる間、ルオンは家にゐても用事がないので、お隣の魚屋へ行つて、お魚の番をします。

そのうちに、ルオンは虎のやうに大きくなりました。長い立髪があつて、ライオンのやうにも見えます。けれども、ちつとも恐ろしくない優しいく顔つきでしたから、相變らず町中の人は達から、いゝ犬だ、立派な犬だと賞められてゐました。

或日のこと、涼也はルオンをつれて森の方へ遊びに行きました。そこには學校友達が五六人種の實を拾つてゐました。涼也是大きな椎の幹にもたれて、



つて敵機へ爆弾を投下するんだ。』

『それを見てゐましたが、一人の子供が、不意に、涼ちゃん、あんたは大人になつた時、やつぱりお医者になるの?』と問ひました。

『いやだ。医者なんか。』涼也は直ぐ答へました。

『どうして、いやだといふの?』その子供は不思議さうに尋ねました。

『医者つて君、苦しい仕事だよ。夜の夜中にも、たゞ起きられるし、それから、どんな汚ない病人でも治療しなければならず……』

涼也は口を歪めながら答へました。

『僕は政治家になるんだ。君、政治家は面白いよ。

僕は代議士になつて、議會で反對派の議員と散々ツ

ばら殴り合ひをしてみたいんだ。』

椎の實をボケットに一杯入れてゐる子供は言ひました。涼也は喧嘩に弱いので、代議士になるのも嫌だと思ひました。

『僕は軍人になつて、戦争に行くんだ。飛行機に乗

つて敵機へ爆弾を投下するんだ。』椎の實を生のまま嚙つてゐた子供は、べつべつと涙を吐き乍ら言ひました。涼也は臆病者でしたから、飛行機からおつこちては大變だと思つたので、軍人になるのも嫌だと思ひました。『僕は學者になるんだ。大學を卒業して、洋行して、そして博士になるんだ。』椎の木の枝に馬乗りになつてゐる子供は、其の枝をゆすぶり乍ら言ひました。涼也は勉強をあまり好みないので、大學を卒業することも、博士になる事も嫌だと思ひました。

『僕は實業家になつて、大金持になるんだ。』

石の凹みへ椎の實を入れて、細長い小石でそれを搗き碎いてゐる子供は言ひました。涼也は自分のお家が、かなりの金持である事を知つてゐましたから、この上苦心して金持になる事も嫌だと思ひました。

『涼ちゃん、君は何になるんだい?』最初の子供は又尋ねました。けれども涼也は、大人になつて、何をしてみたいといふ目的もないのです、たゞ笑つてばかりゐました。

子供達は森を出ました。そして、みんな自分のお家へ歸つて行きました。涼也はルオンをつれて町を歩き乍ら考へました。

『あの人達は今から、いろんな事を考へてゐるが、僕はなせ、そんな事を考へる氣にならないんだらう?』

涼也は自分で自分に問うてみました。そして、『勉強が嫌ひだからだよ。医者になるにも、政治家になるにも、軍人になるにも、學者になるにも、實業家になるにも、一生懸命に勉強して大學や専門學校を卒業しなければならないからだ。僕はそんな勉強が嫌ひだから、何も考へないんだ。』

涼也は自分で自分で自分に、さう答へました。そして、其の答は非常にいい答だと思ひました。

『しかし勉強が嫌だと言つて、このまゝ學校へ行かないでゐたら、おしまひに、どうなるんだらう。』涼也は又た、そんな事を自分で自分で問うてみました。

『勉強しないだつて、家に財産へあれば、立派に生活して行けます。三軒目西隣りの紙屋の爺さんは、「いろは」の「い」の字も知らないが、町内での大金持です。そしてみんな、長屋の人達から、旦那様、旦那様つて尊ばれています。僕はもう尋常六年だ。この日本中に尋常六年生の學力もない人が、何十萬人あるか知れない。僕は尋常六年を卒業したら、もう學校はよしませう。學校をよしたつて、家には財産があるから、誰にも輕蔑される心配はない。』涼也是自分で自分で、そんな答をしました。そして其の答は理窟にかなつた立派な答だと思ひまし

た。其の時ルオンが大きな聲で、ワン、ワンと吠え  
たので、氣づいてみますと、自分の家の表を十間ばかり東へ行き過ぎてゐました。ルオンは門の所に立つて「あなたの家は、こちらだよ。」と云ふやうに尾をふつてゐました。

涼也は家の表まで戻つて來て、ルオンの顔を見ますと、ルオンは長い舌を出して、大きな欠伸をしました。

近所の人達が五六人、門の前に立停つて、「立派な犬だ。賢い犬だ。」と云つて、ルオンを賞めてゐました。其時涼也は思ひました。

「ルオンは一日も一時間も學校へ行かないが、あの通り、みんなから賞められてゐる。私は六年間學校へ行つた。もう、これで十分だ。」

涼しい秋も、冷い冬も過ぎ去つて、そろそろと生温い風が吹いて來ました。涼也のお友達はみんな中間は向ふのお家へ行つて、ウバ車に乗せた赤ちゃんの番をしてゐました。だから町内の人達から、賢い犬だ、善い犬だ、可愛い犬だと云つて貰められます。

「さうですか、教育といふものは、えらいものですね。」

「教育？ 私は唯の一同も、あの犬に教育を施した事はありませんです。」

兵也は不思議さうに、紳士の顔を覗きながら申しました。

「あなたは教育しないでせうが、私の友達がア

学へ入學するのだと云つて、一所懸命に勉強してゐます。けれども涼也は、ひまさへあれば、ルオンをつれて、郊外へ遊びに行つたり、森をかけまはつたりしてゐました。お父様の兵也は、涼也の心を知りませんから、中學校へは早くから入學の願書を出してありました。

もう、一週間後に入學試験だといふ日の午後でした。涼也が學校から歸つてみると、一人の見知らない紳士が来て、玄關の所でお父さまの兵也と立話をしてゐました。紳士は西洋人でした。

「犬の名は何とつけました？」

「ルオンとつけました。」

「それはいい名ですネ。ルオンは性質の善い犬ですか。」

「大變賢い犬です。私が往診に出ますと、直ぐカバンを衝へて、ついて来ます。そして患者の家では、



メリカで教育を致しました。』

紳士は笑ひ乍ら言ひました。涼也はお父さまと紳士との顔を見くらべながら立つてゐました。

『此の犬は、まだアメリカへつれて行つた事はありません。』

兵也も笑ひ乍ら言ひました。

『勿論この犬がアメリカへ行かないといふ事を私は知つてゐます。しかしこの犬は番犬學校で教育されてゐるのです。』

紳士は又た、眞面目にさう言つて、ちつとルオンの顔を見つめてゐました。

『ヘンリイさん、私にはあなたの仰しやる事が、わかりません。』

兵也も眞面目に問ひました。涼也は不思議さうに二人の顔を見つめています。

『實、斯うなんです。私の友人が、アメリカのニューヨークで、番犬學校といふ犬の學校を開いてゐる

のです。所が、今から五年程前に、其の番犬學校の卒業生の犬が一匹、東京の人間に買はれて、日本へ渡つて來たのです。』

『あ、さうですか。それから?』兵也は何度も何度もうなづきました。涼也もお父さまと同じく小さい頃もうなづきました。

『其の犬が東京で産んだ仔を、神戸の人が貰つて來ました。それから其の神戸の夫の産んだ仔を伊勢の人が貰つて來ました。其の伊勢の犬が産んだ仔を、私が貰つて來ました。そして、あなたは私が此のルオンを貰ひました。だから此のルオンの祖父さんの其の祖父さんの其のお父さん……さうですね、ルオンから五代前の先祖が、アメリカのニューヨークの番犬學校を卒業したお蔭で、このルオンまでが、そんなに賢いのです。教育の結果です。全く教育の結果です。』

ヘンリイは感心したやうに首をかしげて、ルオン

の顔をみました。ルオンは尾をふつて嬉しさうに一聲、ワン!と吠えました。

『さうですか。五代前の一匹が番犬學校を卒業した其の遺産で、此・ルオンが、あんなに詫々物の番をするのですか。へえー感心なものですなア。では、人間だつて、一人怠けたら、何代も何代も怠け者が生れるんですネ。』

兵也は、ルオンの顔を見た眼で、ちら、と涼也の顔を見ました。

『え、さうですとも、一人の人が勉強すると、しないとが、此の世界中、及ばず影響といふものは大變なものですよ。』

ヘンリイは、さう言ひ終つて、巧みにヒュウ、ヒュウと口笛を吹きました。

話を聞いてゐた涼也は、そのまま自分の室へかけ込んで行きました。

一週間の後、中學校の試験は終りました。そして學校の掲示板に貼出した合格者八十名の、一番おしまひから二番目に、涼也の名前が墨色も薄く書かれてありました。

ヘンリイは、涼也の頭を撫で乍ら聞いてみました。それは毎日々々涼也のカバンを、中學校の門前まで運んで行く事でした。

或日涼也はルオンの頭を撫で乍ら聞いてみました。『お、ルオン。人間は人間の學校で落第する事があるんだ。犬も犬の學校で落第する事があるかい?』けれどもルオンは、ワンとも何とも言はないで、黙つてカバンを衝へて走りました。

真黒い美しい立髪が、春風に吹かれて、ゆさくと搖ぎました。

# 名曲「嘆きの薔薇」

奇名譚



その六 小畠へ弟  
子入り(前號までの梗概は  
三二頁にあります)

『えッ！　その芳雄といふのは、  
あの芳雄兄さんぢやないんです  
か？』

1 「逸雄！」「兄さん！」

『さうさ、すつかり別人なのさ。  
さア、かうなつて來ると、仲々面  
倒だぞ。』

『えへー、意外ですねえ』逸雄は  
かう言ふより仕事がありませんで  
した。

『で、君の方は何うだつたい?』  
『小畑は小畑でした』慌てしるふ

「ので、妙な言ひ方をしました。  
『小畑は小畑か。まあ、何でもいい、君に警察へ来て貰はう。今、そこにその芳雄といふ少年が来てゐるんだ。』  
神戸を出て東京に来るまでも、いや東京に来てから今が今まで芳雄といふのはあの芳雄だとはか

「お兄さん！」  
と二人が言つた時、探偵は徐ろに口を開いたのでした。  
「芳雄君、君がこの逸雄君の兄さんだといふ證據を何か持つてゐましたか、やがて静かに唄ひ出したのでした。

僕の可愛い弟は  
黒い瞳に紅い唇  
人形のやうな頬をして  
抱かれながら眠ります

「兄さんです！ 兄さんです！」

「おゝ、お前は逸雄ぢやないかい。」  
「えッ！ それぢや、あなたは芳雄兄さんですか！」

り思つてゐました。かうなつて來ると、たしかに芳雄兄さんが二人現れたことになる——一體どうちが本當の芳雄兄さんなのだらう？ 探偵の後から歩きながらも逸雄は心に思ひました。——恐らく帝國演藝場に出たのが、本當の芳雄兄さんに違ひない。いや、あんな珊瑚を盗んだり何かしたのがお兄さんの筈はない——あれは屹度偽物に違ひがない。

すると少年は一寸首を傾げて「お前は逸雄ぢやないか。」「えッ！ それぢや、あなたは芳雄兄さんですか！」

警察に入ると、額田探偵は逸雄を一室に案内してから言ひました  
薄暗い電燈の下で、逸雄が騒ぐ胸に閉されながら待つてみると、や

れにしてもこの歌を、あの悪い方の芳雄が、どうして知つたといふんでせう？

『さうか、兄さんかい……？』がもう一つ證據を見せてくれ。つまり、君の今日帝國演藝場で弾いた名曲を、こゝでもう一度弾いて、この逸雄君にきかしてやつてくれ。きっとそれにも覚えがあるだらうから。』

『はい。』

芳雄はさう答へると、持つて來たものと見えて、一提のヴァイオリンを取り上げました。さうして静かに名曲を弾き始めたのでした。……と、不圖氣がつくと、いつの間にか隣りの部屋から蓄音器が聞えて、それと今弾いてある

芳雄のヴァイオリンとが、ぴつたり合つてゐるではありませんか！

『あッ！』

と思はず芳雄は、弾く手を止めました。

『よし！ 心に覚えがあるだらう！』

さすがは額田探偵、ちつと鋭い目で芳雄を睨んだのでした。

## 2 小畑の家へ行く決心

いつの間に探偵が、あのレコードを見つけたのでせう！ 逸雄は思はず感心してしまひました。けれども、今かうして再會した芳雄兄さんも、父の名前でレコードに吹き込んだりした悪い人であらうとは！ 探偵はやがて隣りの部屋から、一枚のレコードを持って來ました。

『また、兎に角明日ゆつくりと君を調べるから、今夜は歸れない、此方へ來給へ！』

探偵は頸垂れてゐる芳雄を、何處へかつれて行きました。やがてほんの暫く経つてから、探偵は再び戻つて來ました。

『意外は意外を生むものだね。さ



う言つて探偵は徐ろに煙草に火をつけたのでした。  
『あの芳雄兄さん この芳雄兄さん――だが額田さん――その二人は實際本當の兄さんなのでせうか？』逸雄は言ふのでした。

『ふん……』と探偵は一寸笑ひましたが急に眞面目になつて、「何方かがさうかも知れん又何方もさうでないかも知れん。だがそんな空想を描

いてゐるよりも、もつと確りとし  
た證據を握らなければならぬ。

そこで君の手を煩はしたいことが  
出来た。』

『どんなことでせう?』

『君は市田家のために、亡くなつ  
たお父さんのために、少し位の危  
険を犯すことを厭ひはしないだら  
うな?』

探偵の聲は、嚴かに響きました。  
一體何事であらう——と騒ぐ胸を  
抑へく、逸雄は言つたのでした。

『はい、父のために犠牲になつ  
て働きます。』

『うむ、その決心さへあればいい。  
今度は是非君といふ人間が入用な  
のだ』  
『頼田さん、早くそれを仰有つて  
だらう。』

逸雄の心は、勇氣に奮ひ立つて  
ゐました。彼は今警察に捕はれて  
ゐる芳雄のことを思ひながら、再  
びフタバ屋に歸つたのはもうその  
夜も十一時過ぎでした。

### 3 捐じたヴァイオリン

名曲のレコードが亞細亞蓄音器  
會社から出てゐる上はあのシユラ  
イツ、森など、芳雄——今度の一  
とが、きつと何かの關係があ  
るのだらう——だが、最初シユライ  
ツと森とが珊瑚を借りに來たとこ  
ろを見ると、芳雄がヴァイオリン  
を吹き込んだのは、それから後の  
ことに違ひない。

それからそれへと、様々の考へ

下さい。』

『君は明日から、あの小畑楊吉の  
家に行くのだ!』

『えッ! 小畑の家へ……。さう

して何をするのでせう?』

『珊瑚の行方を搜すのだ。それが  
この問題の中心點ではないか。』

『でも、小畑の家へ行つて、それ  
がわかるのでせうか?』

『疑ひを抱いてゐるよりは、行つ  
た方が早い。』

いつになく頼田探偵の聲は、喰

しさを帶びてゐたのでした。

額田探偵の考へでは、この出來  
事を成るだけ、世間に知らしく  
はなかつたのでした。

警察の手を借りないで、出来る  
だけ秘密のうちに事件を解決させ

額田探偵の考へでは、この出來  
事を成るだけ、世間に知らしく  
はなかつたのでした。

『若しいけないと言つたら?』

『その時は又その時だ。だが、兎  
に角君の有りつけの智慧を絞つ

て、一心に頼んだら乾度承知する  
んだ。』

『おちさん、今日から當分歸つて  
まいりません。』

『おや! まあ何だね、その有様

は。フタバ屋のおちさんはすつか  
り驚いて、目をキョト／＼させて

をります。

『一寸遠方へ旅行に出るんです  
——音楽旅行なんですよ。』

フタバ屋を出ると、さすがにた

くさんの人たちが、じろ／＼と眺め

うとう面白に來てしまつたのでし  
た。省線の停車場を降りて言はれ  
たとほり歩いて行くと、ざつとす  
町の以上も行つたころ、右手に大

かつたのでした。そのためには  
是非逸雄が必要でした。

『さうして、一體どこにあるんで  
す、小畑の家は?』逸雄は訊きました。

『それは今よく教へてあげる。と  
にかく君は明日、小畑の家へお弟  
子に入るんだ。逸雄といふ名も市  
田といふ苗字もかくして、あなた  
の曲、聞いてすつかり感心した、  
日々はヴァイオリンの名手になり  
たいと思ふから、どうがお弟子に  
して下さい……と一生懸命に頼む  
んだ。』

『おちさん、今日から當分歸つて  
まいりません。』

『その時は又その時だ。だが、兎  
に角君の有りつけの智慧を絞つ

て、一心に頼んだら乾度承知する  
んだ。』

『おや! まあ何だね、その有様

は。フタバ屋のおちさんはすつか  
り驚いて、目をキョト／＼させて

をります。

『一寸遠方へ旅行に出るんです  
——音楽旅行なんですよ。』

フタバ屋を出ると、さすがにた

くさんの人たちが、じろ／＼と眺め

うとう面白に來てしまつたのでし  
た。省線の停車場を降りて言はれ  
たとほり歩いて行くと、ざつとす  
町の以上も行つたころ、右手に大

ベットから飛び起ると、逸雄  
は昨日額田探偵から貸して貰つた  
木綿の着物に小倉の袴を袴いて、  
頭には汚れたハンチングを冠りま  
した——その有様は、まるで遠い  
田舎からボツと出て來た少年のや  
うでした。

『よし、よし、そこで……』

それから逸雄は、これも昨夜探  
偵から貸して貰つた、夜店で買つ  
たやうな迪もお話をしならないヴァ  
イオリンがありませんが、その直ぐ

裏手に一軒の畫房のやうな家が見えました。屋根の色といひ壁の色

といひ、何となく骸骨のやうな灰色で——まるで廃ても住んでゐるさ

うです。そいつとドアを押すと、

す一つと音もなく開きました。

『御免下さい……』思ひ切つて逸雄は言ひました。

『おう！』

ずつと奥の方から、太い乾から

びた聲が聞えましたが、やがてズ

シン／＼と大きな足音を立てなが

ら、つとそこに現れたのは、昨夜

帝國座で見た小畑その人でした。

『あゝ、先生でございましたか。』

馬鹿丁寧に逸雄はお辭儀をしたの

でした。

『君は誰だい？』

『あのう……私は四國の方から音楽の研究にまわつた中川秀太郎といふ者でございますが、昨夜帝國座で先生のお曲を聴きまして心から先生をお慕ひ申してをります。』

逸雄の方は、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えがありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりました。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えがありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

た。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

た。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

た。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

た。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

た。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

た。何しろもう七年の昔になるの

煙の方ではもうとづくの昔に逸雄が、まだ小畑にたとひ少しでも見覚えありますが、小畑の方ではもうとづくの昔に逸雄の顔など忘れてしまつてをりまし

したこと�이ありません。

『ふうん、仲々熱心なんだね。こ

れまでに大分稽古をしたんだね』

『えへ、三月ばかり……』

『何だ、只つた三月かね？』

『ですから先生に、どうかお仕込

みがお願ひしたいんです。』

『僕の方はお弟子は取らないのだ

が、それぢや一寸上つて、ヴァイ

オリンでも彈いて見給へ。』

逸雄は小畑に伴はれて、一室

に通されました。

『君のお父つあんは何をしてるん

だい？』

『がらんとした應接間に通ると、

小畑はかう言つて訊くのでした。

『僕の父は醫者をしてをります。』

考へて來たとほり逸雄は答へまし



『ふう、そして君が音楽家になりたいって言ふんだね。何でもいいから得意のものを弾いて見給へ、三月稽古をしたのなら、モシモシ龜よ』か「お手をつないで」くらゐ彈けるだらう。』

『さア、どうでせう、一度弾いて見ませうか……』

言ひながら逸雄はヴァイオリンを手にとつて、静かに弾き始めました。それは

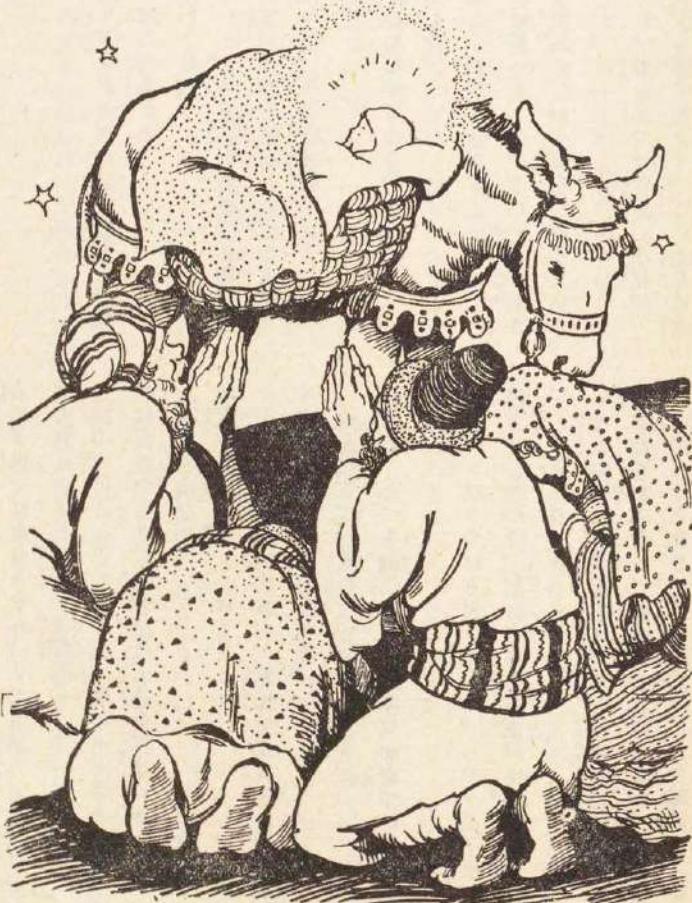
『モシモシ龜よ』どころか、

メンデルスゾンの『春のう

# 月たし色橙

((話のトツメホマ))

三雄木大



三三

た」でした。  
「ひえ、うまい！仲々うまい！  
僕の弟子にしてやらう。」

びつくりしながらも小畑は、心中  
の中で何が企みでもしたやうに、  
嬉しさうに笑つて答へました。こ  
んな汚い損じかゝつたヴァイオリ  
ンで、メンデルスゾーンの「春の  
うた」なんか弾く位だから、音樂  
の天才だとは思つたけれど、まさ  
かに市田四郎の息子だとは氣がつ  
かなかつたのでした。

「先生、お弟子入を許して下さい  
ますか？」

「あゝ、許してやらう。一の弟子  
にしてやらう。その代りに時々は  
舞臺に出なければならぬかも知  
れないと家を出て行きました。

多分劇場へ行くのでせう。  
名曲の開幕が終ると、小畑は何

ない幸です、先生！ どうぞ私  
を一人前のヴァイオリニストにし  
て下さい。」

4 珊瑚だ！

その日から逸雄は、小畑楊吉の  
家でお弟子となつて暮す事となり  
ました。

一日経ち二日経ち三日経ちまし  
た。お弟子といふのですから、定  
めし掃除ぐらゐはしなければなら  
ないかと考へてゐましたが、それ  
もさせません。さうして小畑は晝  
間にもなるのに、逸雄には何一つ  
数えてくれないのでした。

ところが或る朝のことです。不  
圖逸雄が目を醒すと、階下の方か  
ら美しい音樂の音が聞えて來ます  
。今日は早くから稽古だな。  
と耳を澄すと、それはあの「嘆  
きの薔薇」！

「しかしもその聲  
は、あの九官鳥の珊瑚に違ひあり  
ません。」

「珊瑚だ！」逸雄は跳ね起きて、  
そつと階段の側まで忍んで行つ  
たのでした。（次號完結）

三二

處へも行きませんでした。家では  
ヴァイオリンを弾いたこともなけ  
れば、又音譜の本など一つもない  
のでした。逸雄は初めてそれが、  
だん／＼と疑問になつて來まし  
た。さうしてこゝへ来てから一週  
間にもなるのに、逸雄には何一つ  
数えてくれないのでした。

ところが或る朝のことです。不  
圖逸雄が目を醒すと、階下の方か  
ら美しい音樂の音が聞えて來ます  
。今日は早くから稽古だな。  
と耳を澄すと、それはあの「嘆  
きの薔薇」！

「しかしもその聲  
は、あの九官鳥の珊瑚に違ひあり  
ません。」

「珊瑚だ！」逸雄は跳ね起きて、  
そつと階段の側まで忍んで行つ  
たのでした。（次號完結）

淡墨色

に暮れて行く、アラビアの廣い野原を、しづかに進んで行く一隊の商人がありました。

「今晚も風がなくていいな。」

その一隊の主人はかう言つて空を見上げました。

小羊のやうな優しい雲が、空で駆足をしてゐます。

主人の顔には、何か樂しげな微笑が浮びました。

そして、振り向くと、

「ハレマ！ もやすみになつてゐるかい。」

と呼びかけたのでした。

「え、すやすやとよくおやすみです。」

内儀さんのハレマは答へました。それから内儀さんは、引ばつてゐる驢馬のながい耳を、平手でそつと叩いてやるのでした。

驢馬の背中の籠では、瞬を閉ぢた可愛い小兒が、小鳥やうな息をたてゝ寝てゐます。この小兒は商

りと足をとめてしまつたのです。

「おや、どうしたの？」

ハレマはおどろいて、脚でも怪我したのではないのか、と後脚の方へまはつてみました。けれども別に變つたこともありません。

「お前怠けちやいけないよ、さつさとお歩き。」

ハレマはかう言ひました。すると驢馬はふふ…と鼻鳴らしてから言ふのでした

「内儀さん、おきくなさい。」

「あらッ。」

ハレマは目をまるくしたまゝ、棒になつてしまひました。それもその筈です。驢馬が人間の言葉を使つたのです。どうしてびっくりしないでをられませう。

「私が背中にお乗せてゐる方は世界にまたとない方だ。大豫言者だ。神様のお使ひだ。失禮なことがあつてはいけない。」

人の子供ではありません。いつも出入して商ひをしてゐるボストラ宮殿の若様なのです。

前の日のことでした。商人がボストラの宮殿へ商ひに行つたとき、宮殿では若様を里子に出したいといつてをりました。

「私がお育て申し上げませうか。」

と、ハレマが申出ると、宮殿では大へんお喜びですぐに約束ができたのです。

「お前ならば、安心しておられます。」

「はい、きつと間違ひなく立派にお育ていたします。」

「お前ならば、安心しておられます。」

ハレマはきつぱり言ひました。ハレマは子供が大好きでしたから、だいじに育て上げて養められたいとおひました。

小兒がきふに目をさまして、両手を高く擧げて、何だかわからぬことを言ひだしました。するとその時です。それまで黙つて歩いてゐた驢馬が、びた

驢馬はかう言ひました。ハレマをはじめ商人たちは呆れてばんやりと驢馬の長い顔を見つめましたが次には背中の小兒の方へ目を移したのです。

小兒は何にも言ひません。けれども両目が玉のやうに光つて、頭の上にさつと金色の光が輝いたのです。

商人たちはみんな土の上へ坐つて、兩掌を合せて拜みました。有難い尊い氣がしたのです。

暫くして、みんなが立ち上つたときには、何の變りもなかつたやうに驢馬が歩きだしました。そして、どこから集つて來たのか、羊がたくさん、その周囲を取り巻いてゐるのでした。

「この若様は偉いお方になるだらう、驢馬の言つたのは神様のお告げにちがひない。」

ハレマはひました。そしていつまでも考へながら、驢馬の後について歩くのでした。

廣い廣い野原は、すつかり夜になりました。涼し

い風が草の上を叫びながら走つて行きます。

ぼうつとそこらが明るくなりました。月が出たのです。橙色の大月が……。商人の群は細長い影をおとしながら進んで行きました。

## 2

ボストラ宮殿から、商人のところへ男子にやられた小兒の名はマホメットといひました。後にマメット教といふ教へをひらいたほど立派な人ですから、小さい時からすゐぶんなみの子供とはちがつたところがありました。大人に考へられないことを考へた

り、子供にはできないと思はれることをすることができました。

あまり利口な子供をもつたお母さんやお父さんはそれを心配することがあります。里親のハレマもさ

うでした。

「氣味のわるいほど賢い子だ。」

ハレマはマホメットのことを考へると、何だか怖いやうな氣さへするのでした。マホメットは、生れて三ヶ月で歩いたのです。七ヶ月たつと大人のやうに走りました。一年経つたときには、弓を射ることが大へん上手になつたからでした。

ある日のことです、暖い日和です。ちつとしてゐられないやうな氣がしたので、マホメットはハレマの息子のユスラウドを誘つて、林へ遊びに出かけました。

「ごらん。」

と、マホメットは大きい樹の梢を指して、「ねえ、君、あそこに鳥がおほせい集つてゐるだらう、何をしてゐるかわかるかい。」

笑ひながら言ひました。

「そんなことわからないよ。」

ユスラウドが答へると、マホメットはをかしさう

に笑ひました。

「僕にはちやんとわかるんだよ、あれは小鳥の學校でね、いま唱歌を習つてゐるところさ。」

「何アんだ。」

と、ユスラウドが言ひました。それから二人は顔を見合せて、あはゝゝゝと腹を抱へて笑つたのです。

あはゝゝゝ。

林の中いづばいに笑ひ聲がひろがつて行きました。それに驚いたのでせう、小鳥の學校はたちまちおしまひになつて、ぱたぱた羽音をたてゝ、みんな遠くへ逃げて行つてしまひました。

マホメットは、小鳥の飛んでいつた方をちつと見送りました。すると、空に不思議な雲が湧いて、ぐんぐん下りてくるのでした。そして、たうとうマホメットとユスラウド、身體をすっぽりと包んでしまつたのです。

といつたきりでした。マホメットは氣が遠くなつてしまつたのです。

のんきな鳥の聲が耳に入つて、マホメットは正氣に戻りました。側を見るとユスラウドが倒れておりました。



ますから。  
「君、君。  
と、一生懸命で搖り起しました。

## 3

その晩のことです。ハレマの家ではハレマと良人の商人とがひそひそ話ををしてをりました。

「困つたことができましたねえ。」

ハレマは大きな溜息を吐いて、そつと隣の部屋の様子を眺めました。すやすやと静かな鼾が聞えるのは、マホメットがよく眠つてゐるのです。

主人は腕を拱んでうつ向いて、その日、村に起つた騒ぎについて考へてをりました。

夕方主八が用先から歸らうとして、酒屋の前を通りかけたとき、大勢人ばかりがしてゐました。覗いてみると一人の旅人が、集つた人たちに次のやうに言つてゐるのでした。

「私は豫言者だ。これから生き、この村にどんなことが起るか、ちゃんと知つてゐる。」

「ちやきかしてくれ。」誰かが言ひました。

「よろしい。」

ユスラウドはむづくり跳ね起きましたが、マホメットの顔を見るといきなりどんどん駆け出します。二人の足音が林の中へ響き渡りました。

と、豫言者は言ひました。  
「この村にはおそろしいことが起る。それは悪魔の魂をもつた子供があるからだ。この子供は村を滅ぼしてしまふだらう。だからいまのうちに、その子供のないやうにしてしまはなくていけない。」  
村の人たちは顔色を變へました。

「その子供はどうこの子だ。見つけて打ち殺せ。」

かう日々に叫んでゐたのでした。

主人はその時、マホメットのことを考へたのです。ふだんから利口すぎて氣味の悪い子だと思つてゐたところでした。もし村の人たちもさう思つたなら大へん、氣のつかないうちにマホメットを他處へやつてしまはう、と決心して、内儀さんに相談したのでした。内儀さんは、マホメットが林でひどい目にあつたことを話しました。

商人はいよいよ怖くなつてきました。

「あの豫言者のいふとほりかもしれないよ。そんな

變つたことばかりあるなんて、どうも氣味がわるくてしかたがない。明日になつたなら、早くあの子を返してしまはう。』

『でも……』  
と、ハレマは言ひました。赤ン坊の時からだいちに育てたマホメットと別れるのは、どんなに悲しいかしれないのです。

『その方がいいよ、こゝへおくと生命が危いかもしない。村には亂暴者があるからな。』  
けれども商人はかう言つて、どうしてもマホメットを返さうとするのです。

『しかたがありません、返すことにしておきます。』  
ハレマは涙をこぼしながら言ひました。そして隣の部屋へ行つて、マホメットの額に接吻しながら言ひました。

『マホメットや、いへえ若様、もうあなたはもとの若様になるのです。商人の息子のマホメットでは

## 4

翌朝になりました。

ハレマはマホメットの寝てゐる側へ行つて、『さ、お起きなさい。』

と、優しく搖り起しました。

マホメットは星よりも美しく澄んだ目をぱちりとひらいて、『お早う。』

と答へました。

『もうお出かけにならなければいけません。』

ハレマは丁寧な言葉で言ひました。もうボストラ宮殿へ戻つて、もとの若様になる方だと思つたからわざとさうしたのです。けれども、マホメットにはわけがわかりません。不思議さうに目をぱちぱちさせました。

『どうして？　どこへ行くの？』  
『メツカへお歸りになるのです。』

と、ハレマが言ひました。

『あなたは立派な若様なのです。今日はほんとのお家へお歸りにならなければなりません。お母さまがお待ちになつていらつしやいます。』

マホメットの顔色がさつと變りました。けれどもちきに、もとの平和なやうになると、だまつたまで合點きました。そしてなつかしげに窓の外眺めたのでありました。

野原には橙色の月が照つてをりました。静かな静かな晩です。マホメットはハレマに案内されながらメツカの方へ馬を急がせて行くのでありました。

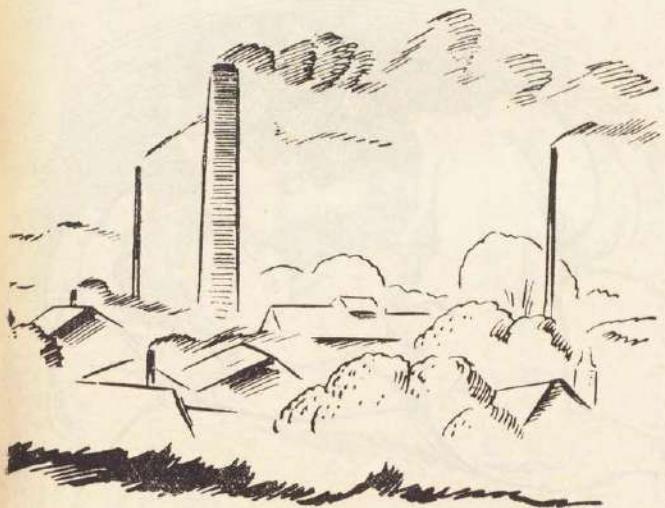
『メツカでは……』  
と、マホメットは咳きました。そしてハレマの方を向いてにつこり笑つたのでした。(をはり)



# 晴れた朝

若山牧水

四二



煙の競走

ならんだ煙突

たかくい煙突

ひいくい煙突

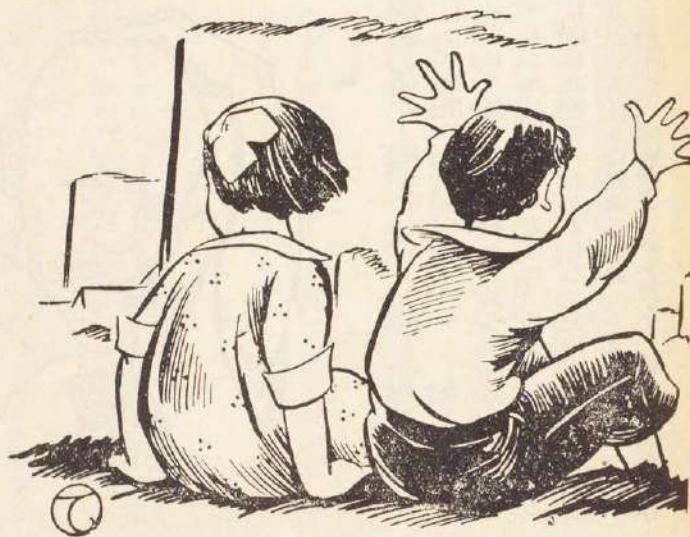
出る出る煙

流れる煙

なびいた煙

競走

煙の競走



四三



## ひんびら怒りの 徳兵衛(とくへいえ)

早田 稔夫

昔或る所に、徳兵衛と云ふ大層よく怒る人がありました。近所の人は徳兵衛が餘りよく怒るので、「ビンビラ怒りの徳兵衛」と云ふあだをつけました。ところが徳兵衛の近所に、仙太と云ふ大のいたづら好きの若者がありました。此仙太は、「いつかあのビンビラ怒りの徳兵衛を取つちめてやう」と思つて、折を待つて居ました。ところが此の村

では、年に一度、讃岐の金刀比羅様へ参詣する風習がありました。今年は龜五郎、勝太と云ふ、徳兵衛の近所の人が番に當りました。徳兵衛も一度は金刀比羅様へ参詣したいと思つて居る所ですから、此の兩人と詣る事になりました。是を聞いた仙太は、取つちめてやるのは此の時だと、自分も旨く其の仲間に這入り、龜五郎、勝太の兩人に、自分の考へた謀を授けました。どんな謀でせう？ 龜五郎は、ニヤリと微笑んで、すぐ徳兵衛の家に行き、

『徳兵衛さん。俺は金刀比羅参りの事で來たんだが、金刀比羅様へ詣つて來る間、どんな事があつても、決して怒らないと云ふ「怒りつこ無し」の約束をしようぢやありませんか。』と云ひました。

『なる程。やはり神詣は笑ひながら詣るのが一番いい。ぢや、さうしませう。』

『早速賛成して奥れて有難い。では明朝早く出懸けませう。』

龜五郎は我家に歸ると、金刀比羅詣りの仕度で其の日が暮れました。

二

おかみさん達や、五六人の村入におくられ、一行、龜五郎、勝太、徳兵衛、仙太の四人は、勢よく村を立ちました。

二夜、三夜と泊りを重ね、恰度六夜泊りの事でした。徳兵衛は疲れた爲か、いつもよりぐつすりよく

寝つたと思つて起き出でますと、三人の姿は見えません。宿の女中に聞いて見ますと、『ハイあの三人のお方は、もうとうにお立ちになりました。』

『何に、とうに立つた？』

『そして、きまりが悪いなら、是で頭をかくして来なさいと云つて、この手拭ひを置いてゆきました。』

『何に頭？』

徳兵衛は、不審に思つて頭をなでて見ると驚きました。頭のちよん齧が、いつの間に剃られたのか、くり／＼坊主になつて居ます。其の時分は男も女も鬚を結つて居て、今の女の人の様に鬚を大事にして居たのです。徳兵衛の顔に血の氣がさすと見る間に坊主頭から湯氣をぼか／＼立たせ、

『己れ、よくも人を馬鹿にしたな。この敵を討たないでおくものか。』

おろ／＼聲でかう云ふと、眼の邊りが熱くなり、

ほろくと涙を流しました。けれど、いつまで怒つて居ても仕方がありません。いつもだつたら何處までも追ひかけて行つて、其の仇を討つのでしたが、「怒りつこ無し」の約束があるので、どうする事も出来ません。仕なく坊主頭をきまり悪るさうに、手拭で頬かむりをして、行く時と反対に、すぐと歸途につきました。ふと或る古着屋の前を通ると、一着の古い墨染の衣が店先にかゝつて居ます。

徳兵衛の胸には何か浮んだらしく、喜んで其の衣を買ひ求めました。そしてそれを身に着けると、よく似合ふ俄か坊主が出来ました。

徳兵衛は路を急ぎ、やうやく我家へ歸りました。

「今歸つたぞ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

驚いたのはおかみさんです。

「おやまあ、あなた。もうお歸りですか？ まあ、どうしたのです、其の姿は。」

「あー南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「まあいつお坊さんになられたのです。そして龜五郎さん、仙太さん、勝太さん等はどうしたんです。あの人等も、もう歸ったのですか？」

「いやく生きて歸つたのは俺だけだ。」

「えッ、生きて歸つたのは、あなただけ？」

「いや話は後でするから、龜五郎さんや仙太さん所のおかみさんを呼んで来なさい。」

「では呼んで来ます。」

おかみさんは表へ飛び出しました。後で徳兵衛は旨く行くぞとばかり微笑みました。

### 三

やがておかみさん達が集つて來ました。何れも顔を真青にし、

「生きて歸つたのはあなた一人だけですつて？ どうぞ其の譯を聞かして下さい。」

氣の弱いおかみさん達は、もう眼に涙を一杯ため、



声はおろ／＼してゐます。

「早く集つて來て呉れた。まあ、あわてずに、譯を聞いてお呉れ。實は、私等一行は道中無事、船乗り場まで、えゝと、五日六日、さう／＼六日目に着いたのだ。いよ／＼船に乗つて目ざす四國へ急いだのだが、どうした事か急に大風が起り、船はどう／＼顛覆して、乗つて居た者は皆海の中にはき落されてしまつたのだ」

「えツ、船がてんぶく？」

「あなたも一しょに？」

「おー俺も一緒だ。所が俺は其時氣が遠くなつて仕舞つたらしく、氣がついて見ると、元の船乗り場で見知らぬ一人の坊さんが、俺を介抱して呉れて居る。仙太さんも其處に打ち上げられたらしく、蒼い顔をして寝て居たが、俺が生き返るのを見て云ふには、尼

になつて靈魂を吊つて呉れと云つて下さい」と、かう云つて、餘り水を呑んだと見え、とう／＼死んで仕舞つたのだ。それで俺もかうやつて、罪亡ぼしの爲め坊子になつたのだ。やれやれ氣の毒な事だ。  
南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」  
德兵衛はをかしさをこらへながら、眞しやかに坊さま口調で、やたらに南無阿彌陀佛を繰り返しながら、  
「是と云ふのも、皆前世の因縁だから仕方がない。せめて夫の靈魂を吊ふ爲め、あんた達も尼さんになりなさい。南無阿彌陀佛」

おかみさん達はもうたまらず、ソツと其の場に泣きくづれて仕舞ひました。  
「ではあの時、勢よく源坊に「源坊よ。行つて来るよ。温初しく待つて居ろよ。歸りには御土産をどつさり持つて来るだ」と云つて家を出たのが、今生の別れであつたのか。」

とあたりかまはず、泣き叫んで居ました。

『どうぞ徳兵衛さん、御願ひですから、私の頭を剃つて下さい。死んだ夫の後を弔ひますから』

『徳兵衛さん。どうぞ私の  
も剃つて下さい。』

おかみさん達が頼むの  
を聞いて、心の中で呟め  
たと喜びながら、  
『では剃つて進せよう。』  
と三人の頭をくりく  
坊主に剃り、古着屋から三  
着の墨染の衣を買ひ求め、おか  
みさん達に着せました。そして白  
木の位牌を造り、毎日々々、線香を立  
て、鐘をチーンチーンとたゝかせ、南無阿  
彌陀佛を唱へさせて居ました。



話ばかり、仙太、龜五郎、勝太の三人は、計略が旨く行つたのを喜びながら、無事参詣をすませ、我が家へ歸つて來ました。

「おや變な鐘の音がするせ。どうやら仙太さん所らしい。」

「おや本当に。仙太さん所らしいぞ。」

「はてな、まさか觀音講の宿に當つたのでもあるまいし。まあ、何んでもいい。ちやあ左様なら。」

仙太は二人と別れ、

「おい今歸つたよ。やれ〜。」

ガラリと勢よく障子を開けて驚きました。正面の佛壇の戸が開かれ居て、アカ〜と燈明に照されながら、一人の坊主が一心に念佛を唱へて居ます。餘り一心になつて居るのか、仙太の歸つたのも知ら

ないらしく、鐘をたいては南無阿彌陀佛と念佛を唱へて居ます。

「おや變な坊主だ。どこの坊主だらう。オヤどうや

ら女らしいぞ。」

と思ひながら、わらぢをぬいで座敷へ上り、佛壇を見ると、一つの白木の位牌が正面に置かれてあります。

「あッ。」

と驚くとたん、今まで頻と念佛を唱へて居た坊主が、ひよいと後をふり向きました。そして、仙太が居るのを見ると驚いて、  
「ヒヤツ、助けてくれ。」  
と叫びながら、土間へ飛び下りました。仙太はアツケに取られて見て居ましたが、何が何やらさつぱり譯が判らず、おまけに今日は、家へ歸へればゆつくり、休めると思つたので、疲れたのをがまんして漸く歸つて來たばかりですから、此の有様が見ると、とう〜腰を抜かし、眼ばかり、ぱちくりさせて居ます。

此の時、表から飛び込んで來た者があります。そ

三人は思ひ思ひに喰鳴りながら、徳兵衛の内へ飛び込みました。徳兵衛は火鉢のそばで、スバヌハ煙草を服みながら、青光する頭を三人の前に突き出し、「なんだい。オヤ仙太さんに、龜五郎さんに、勝太さんぢやないか。馬鹿に勢がい、ね、ハ、ハ、ハ、ハ。」

お剛さん達金刀比羅様へ詣つて來る間は、「怒りつけ無し」の約束ぢやなかつたかい。」

「ム、ム、ム。三人は徳兵衛の落ちついた一言に、見事參つて仕舞ひました。

これで話はおしまひです。三人は、いくら怒つても仕方がありません。元々自分達から「怒りつけ無し」の規則を出したのですから。そこで四人は仲直をしました。床の下へもぐり込んだ仙太さんのおかみさんは間もなく引出されました。

「ビンビラ怒りの徳兵衛さん」は以後餘り怒らなくなりました。「ビンビラ怒りの徳兵衛さん」は今度は『ニコニコ徳兵衛』位になるでせう。(をはり)

れは隣の龜五郎さんです。是を見た坊主は、あつと叫んだまゝ、床の下へもぐり込んでしまひました。  
「おい仙太さん。お前の所もか。俺の所もやられた。」  
龜五郎さんはおろ〜聲です。  
「何んだ。俺は狐に化かされたらしい。今變な坊主が床の下へもぐり込んだ。」  
「なに仙太さん氣を確に持て。そりやお前さん所のおかみさんだよ。徳の奴め、いま〜しい奴だ。」  
「えッ俺の所の。」  
「さうさ。實はかう〜だ。これから乗込んで行つて、ひどい目にあはせてやらう。」  
と龜五郎は一伍一什を話し、勝太を誘つて徳兵衛の家へ参りました。  
「徳兵衛これへ出ろ。なぐり殺してやるぞ。」  
「よくも俺達が居ないと呪つて、ひどい事をしたな。さア、男らしくこれへ出ろ。」





## 小鳥は空にそら

藤 藤 雄

「お前は、タマルとお祖父様とどつちが怖いと思ふかね。」  
老伯爵は、初めて會つた孫の義雄に訊ねた。

「それはねえお祖父様。僕どつちも怖くなんかありませんよ。お祖父様は、僕のお父様のお父様だし、タマルはこんなによく僕に馴いてゐるのですもの。」  
伯爵邸の界限では、何人ひとり怖れない者もない猛犬のタマルが、義雄には尻尾を振つてついて居た。頑固で痼疾持の老伯は、此の有様を見て先づ機嫌をなほした。それから、難しい質問を出した。

「お前はこの邸に來て嬉しいとは思はぬかい。まだ見せないが、お前の居室は、お伽噺の宮殿のやうだし、そして明日になれば乗るであらうが、アラビア種の子馬もお前のだよ。そのほか、何でも欲しい物があれば、さう仙石に云ひつけば、何でも直ぐお前の物になる。」

「それは僕だつてこんな立派なお邸に住むのをいやはとは思ひません。ですけれど、若しお母様が御一緒だつたら、と僕はそればかりを思つて悲しくなるのです。」

「さうか、財産よりも爵位よりも、お前にはお母様が尊いと見える。」

「こんなのはありませんでした。ですけれど薪を燃たてて燃えてゐた。」

「やすフアイア・ブレイスがありました。お母様はその前で、いつでも編物をなさいましたし、僕は繪を描いたり、美津からお伽噺を讀んで貰つたりしました。」

「義雄が母のことを話したので、老伯爵は不機嫌になつた。黙つて呼鈴を押したら、間もなく背の高い四十歳ぐらゐな婦人がはひつて來た。早くから夫を失つて、自分の子供はないが、曾ては小學校の先生もしたことがあるので、老伯は召使の中から此の婦

人を擇んで義雄の世話を頼んだ。河本夫人といふのがその姓であつた。

「これが孫の義雄だよ。御苦勞だが此の子の室へ案内してお呉れ。」

さう云ひつけておいて、義雄には挨拶もせずに老伯は室を出て行つた。

それから義雄は、河本夫人に案内されて長い廊下を通つた。義雄の室は、壁も窓布も卵黃色で、それ

へ強い電燈が明るく反射してゐた。

河本夫人は、一とおり窓や寢臺をあらためての

ち、小腰をかゞめてやさしく云つたのであつた。

「義雄様、今夜は随分お疲れで居らつしやいませ

う。もうお寝みあそばした方がおよろしうございませう。ばあやが何かお伽噺でもいたしませうか。」

「いいえ、おばさん。」

義雄は寂しげな顔をしてゐた。

「僕はお話を聞かなくていいのです。京都にゐた

頃は、いつでも、お母様が夜のお祈禱をしたのち、「おやすみ」と云つて電氣を消して行かれるのでした。それから僕は、直ぐ眼をつぶつてねいるのです。夢はあんまり見ませんでしたよ。」

そこでちよつと言葉を切つたが、また續けた。

「あのね、をばさん、お祈禱をして下さい。」

「あやは信者ではありませんのでお祈禱はできませんの。」

河本夫人は微笑した。そのとき義雄は、ふと思ひついたやうに訊ねた。

「ねえ、おばさん、此の窓から何が見えますか？」

「晝間でしたらお山だの森だの、そして富士山だのが見えますよ、ですけれど、今は夜でせう。お星様

のほかには何んにも見えませんわ。」

「でも、お母様のお家、見えるでせう？」

「お別邸でござりますか。お燈がついて居ませうか

ら、お見えになるかも知れませんわ。晝間でしたら



すぐそこなのでござりますけれども。」

河本夫人は窓を開けて義雄を呼んだ。窓の外は真闇ではあつたが、黒い丘の中腹や、丘と丘との渓谷には家々の灯がきらりと輝いてゐた。

「おむかうに暗い森が見えませう。あの森の右の明るい窓がさうなので御座います。」

河本夫人は、義雄の小さな肩に手を掛けていたはるやうにし 教へた。

「さう、わかりました。どうもありがたう。ではおばさんお寝みなさい。」

河本夫人は、別邸の所在を訊いた義雄の心の中を考へて、いちらしさに涙ぐみながら室を離れた。

「合圖だつて？ うむ、何の合圖かね。」「義雄や、お寝み！ つて云つていらつゝやるんで



切であつたこともなかつたので、義雄がこんなに可愛かつたり逢ひたかつたりする事が、何だか少しきまりが悪いやうに思へて、長い廊下を通るのにも、なるだけ人に見られないやうに、小さくなつてゐた。その時義雄は窓に凭れて別邸の灯影を一生懸命ながめてゐたので、祖父のはひつて來たことに気が付かなかつた。

「はてな、何を見てゐるのかな。義雄、お前なにをして居る？」

「お祖父様でしたか、僕たちとも気がつきませんでした。御免下さい。」

「謝らなくともよい。何をして居たかを訊いたまでのことだから。」

僕、お母様のお邸の窓を見て居たところなのです。あゝ、お祖父様、御覽なさい。お母様のお邸の電燈が消えいでせう。そらまたついたでせう、あれはお母様の合圖なんですよ。」

す。京都にゐた時は、いつでもお母様が僕の枕元でお祈禱をして下すつたのですが、今はそれが出来ないので、毎晩、僕の寝る時間には、あゝして合圖をして下さるお約束なんです。

「義雄や、おやすみ、  
神様はお前を守つて下さる。」

たとへお母様とは離れてゐても、  
私達の神様はいつでもお一緒ですよ。」

あれは、お母様がさう云つてあらつしやることころなんです。僕の方でも御返事をしなければなりません。ねえ、お祖父様、僕は背が低くて電燈に届きません。お祖父様ちよつと電燈を消したりつけたりして下さり。」「うむ」

老伯は、にがい顔になつて、電燈のスキッヂを捻つた。そして、これは電燈のコオドを長くして信號のためにスタンドを作つてやらねばなるまい、と思



つた。然し、すぐまた氣持を變へた。  
「夜おそく窓を開けたりなんかしてはいけないよ。  
要心も悪いし、それにお前が風邪をひいても困るからね。」

老伯は孫の室を去つて、自分の寢室に歸つたが、  
もうすつかり不機嫌になつてゐた。そして、河本夫  
人を呼びへけて云つた。

「夜間は、あの室の窓に鎌をして、そして嚴重にカ  
ーテンを閉めてくれなくては困る。要心が悪いから  
人を呼んで云つた。」「あんな事をしてゐたのは、いつが來ても義雄が  
母を忘れる時がない。明日になつたら仙石を遣し  
て、あんなつまらぬ眞似をせねやう、あの女に嚴談  
しなければならぬ。」  
その時には遠い別邸の窓の灯も既に消えて、そし  
て義雄もおそらく夢を結んだところであらう。  
突然、タマルがけたゞしく吠えた。まるで火の

「一體、どうしたんだ？」  
「さつきお祖父様とお別れして、僕寝臺に入つてお  
祈禱してゐたのです。すると窓の下でタマルが狂犬  
のやうに吠えるのでせう、何かと思つて窓を開ける  
と、恐ろしい顔のおばさんが起つてゐましてね、僕  
に京都から來たのかつて訊くのです。さうだと云ふ  
と、いきなり窓のふちに手をかけました。そのとき  
タマルが飛びかゝつて、そのおばさんの肩に咬みつ  
いたのです。」

「うむ、さうが。だから窓を開けたりなどしてはい  
けないとお祖父様が云つただらう。さあ、お寝み、  
もう何でもないよ。」老伯には何か思ひ當ることがあ  
つたであらう。そして、  
「今更どんな事があつても義雄は此の家の後嗣だ。」  
老伯はさう云ながら、自分の寢室へ歸つて、そ  
して下僕を呼んで義雄の室に嚴重に戸閉りをさせ  
た。

（つづく）

「おやおや、お祖父様でしたか。僕たしかに女人の人  
だと思つたのですが。」

淺草名所  
雷門の由來

長崎五六

コロ／＼としなひ云へなかつた雷神の子が、  
もうゴロ／＼と云へるやうになりました。フ  
ウ／＼としか云へなかつた風神の子が、やう  
やくブカ／＼と云へるやうになりました。そ  
こで、義達が相談して、もうそろ／＼世間を見  
に連れて出てやうと、雲や雨の神に頼ん  
で、子供相應の天氣を待つてゐました。  
梅雨が明けてから十日ばかり過ぎました。  
恰度今日あたりはよからうと、知らせがあつ  
たので、雷と風の親子は早速支度をして、雲  
や雨と一緒に出掛けました。ソレツと言ふ  
と、風の子は數つたり、ブカ／＼吹き出し  
ました。雲は心得てドン／＼ひろがつて行き  
ます。後から雷の子はゴロ／＼鳴り出しま  
すと、雨が調子を合せて、ザアーッと降り出  
します。



ギリシャ神話 オデッセーの航海

藤川篤夫 譯

昔、ギリシャの西の方に、イサカと云ふ小さな島があつて、そこにオデッセーと云ふ王様がゐました。オデッセーは強い大將で、其名が世界中に知れ貫つてなりました。

オデッセーは、自ら軍隊の先登に立つて勇ましく駆けました。數多くのギリシャ方の英雄の内で、誰一人としてオデッセーの武勇に及ぶ者はありませんでした。やがてトロイの城も陥落して、ギリシャの将卒等は皆、分捕品とともに故郷へ歸る事になりました。オデッセーの乗つた船は、航に一杯の風を孕んで、故郷イサカの島に向つて出帆しました。もう直き懐かしい妻子達に逢ふ事が出来

ると思ふと、オデッセーの胸は何んとも云へない喜びに躍りました。“併し、オデッセーは、長い、そして苦しむ旅をした後でなければ、故郷へ歸る事が出来なかつたのです。”出帆してから四日の晩、烈しい大暴風が起りました。天も地も眞暗となつて、船は切れるやうな風の爲に、艦橋のやうになつてしまひました。船中の人には生きた心地もなく、たゞ互ひに相抱いて運を天に任せて居るばかりでした。



江戸淺草の諏訪町に、德兵衛と云ふ人がゐました。此の人は香具師と云つて、祭禮や、縁日や、盛り場などへ出見る見世物の親方でした。ある日、途中で夕立ちに遇つて、ビショ濡れになつて、駆け戻つて、自分の家の五六軒先まで来ますと、目の前へヒカリ、ケラガーン、と大きな音がして何か落ちて来ました。



四日間の安らかな散策の後、ナツセーの一  
一行は、また一つの島に着きました。この島  
は一面に青々とした若菜に覆はれてゐて、廣  
い牧場のやうな草原が海の方に擴がり、そこ  
には数知れぬ程渾山の山羊が遊んで居りま  
した。ナツセー達は上陸するところ直ぐ、弓や矢を  
槍で、この山羊の群を駆しました。そして其  
日の晩、船に登るまで、山羊の料理で食べ  
たり飲んだりして、樂しく暮しました。  
この島の向ふ側には、シクロプト云ふ大き  
な島があつて、其處には恐ろしい一つ目の大

男が住んで居りました。大男の名  
と云ひ、海の神、オセイドン  
た。オセイセーは、この大男と會  
なつたので、家來の中から十二人  
選んで、シクロプス島へ出かけて行  
く。其時オセイセーは、匂ひの強い、  
酒を一纏呑つて行く事を忘れました。  
廻宿へ行って見ると、恰度大男  
羊を連れて、牧場へ行った留守で  
巖窟の四方の壁には、大男の作  
すらりと掛けられてありました。

「さあ、これは大評判の雷と風の神の番り。わが天竺はおろかの事、世界中にもない見世物、速く御見物にならないと、天子に歸つておしまひになります。サア入らしやいました。

「さあ、これは大評判の雷番と風の神の猪  
り。わが天竺はおろかの事、世界中にもない  
見世物、速く御見物にならないと、天子に歸  
つておしまひになります。サア入らしや  
く。」  
と客を呼ぶますので、江戸中大評判になり  
ました。  
押すなゝの大入りで、徳兵衛は大まうけ  
をしました。  
併し徳兵衛は、太夫に天へ歸りたいなどと  
言はれては大變だと思ひましたので、高いお  
金を出して、虎の皮のふんどしを買ってやつ  
たりして、いふく二人の機縫をとつてあま  
した。  
其中に雷も風の子もだんん成長して來  
ましたので、子供の時のやうな可憐な氣が無く  
なつて、だんん姿形が、恐ろしくなつて  
来ました。そのために此頃では、見物の客も  
少くなつて、其上二人がいるゝ贅澤なこ  
とを言ひ出でて我儘をするので、徳兵衛もた  
うとう思ひ切つて、二人を追ひ出してひひ

十日目の朝、やつと颪風暴風が拂まつて、船は一つの島へ着きました。この島は「蓮喰島レシマドリ島」といふ不思議な名が附いて居て、島中の人々は皆、蓮の實蓮子を食べて生きてゐました。この島の蓮の實は、蜜のやうに甘くて、それがそれは旨うまいものでした。併し誰でも一口食べた者は、今迄の事をすっかり忘れてしまつて、何だか、かう馬鹿のやうになつてしまふのでした。島の人々は、オーディセーの家來の三人に、この蓮の實を食べさせました。すると三人の家來は、もう船へ歸ると云ふ聲が

失くなつてしまつて、何時までもこの島に止  
まつてゐて、甘い蓮の實を食べ、樂しい夢ば  
かり見てゐたいたいと思ふやうになりました。  
オテツセーは驚いて、三人を船へ連れ戻さ  
うとしましたが、三人は、こんないゝ國な去  
るのば躊躇だと泣叫んで、どうしても船へ歸ら  
うとしないのです。  
オテツセーは仕方なく、無理やりに三人を  
引張つて来て、船の橋にしつかりと縛り  
つけ、急いでこの恐ろしい島を出帆しまし  
た。

たので、始めは天へ歸りたいと泣いてゐたが雷や風の子も、つひかくと此所にあつて、だん／＼自家の家のことを忘れて了ひきした。

そこで、徳兵衛は、モカい時分と、いろいろ詮な仕込みはじめました。

それ故に太鼓をたゝかせ、風の神に病氣を

りなさせ、そして二人に迷らせるのでした。そして、す／＼覺え込んだところで、浅草の奥山へ見世物に出しました。

徳兵衛はアツト言つて尻もなついて、よく見ると、繪にある通り、雪と風の神のかわいらしいのがあるので、ピックりしましたが、そこは平當から慾に目のない徳兵衛の事です。から「セシ」「雷さまと、風の神の功」チチナ。よくおいででしたね。マア「家へえらつしやい」と優しくいひますと、雷と風の神の子は、すっかりその氣になつて徳兵衛の家へ來ました。



「どうです。この乾船を皆んな船へ進んで、逃げださうぢやありませんか」と来家の一人が笑ひながら云ひました。併しオアツセーは、そんな泥棒の眞似をするのは厭でしたから承知しませんでした。

「この恐ろしい有様に、オアツセーの家來達は船へ上つて、物も云ふ事が出来ませんでした。翌日になると、大男は又、山羊の群を連れて牧場へ出かけて行きました。巣窟に残されたオアツセーは、どうしてこの敵討ちをしようかと考へて居りましたが、方近くなつて、やつと一つのいい計略を思ひつきました。先づ一本の長い丸太を見つけて来て、その先端を尖らせました。オアツセーは、この槍で、大男の一つ目を突刺して

やうとうと考へたのです。やがて大男が歸つて来ました。オアツセーは幹から持つて来た強い薬酒をついで大男にすゝめました。大男は舌戻をうつて『これは甘い!』お前のものを持つてな。もう一杯呉れ。などと云つて、どんな酒を飲みました。そして到頭、酔ひぶれて、高齢をかいて寝てしまひました。オアツセーは四人の家來と共に、例の槍を取り上げました。そしてきなり大男の一つ目にぐりと突刺しました。

分にも憂愁をなつかされて、今まで天へも歸られず、田間でも對手にして喰れる人もなくなりつて、ホトト固つてしまひました。そこで二人は一しょに、淺草の觀音様へ行つてお願いをしました。



すると、慈悲深い觀音様は、二人を不憫に思ひ召され、一生懸命として使つて下さることになりました。

で、二人は大喜びで、雷神は元の通り裸になつて、雷門を背負ひ、風の神は袋を擔いで門の左右に立ちならんで、江戸の名物になりました。めでたしく。

昔さんは淺草の觀音様へお詣りになる時、電車が留る所で、雷門人々と言ひますのでお聞きになりませぬ。彼所には元門が在つて、雷神と風神が左右に立つてゐました。

其門は今から五十年許り前に火事に焼けて仕舞つて、此の話の雷神、風神は皆さんにお目に應ることが出来なくなりました。

した。  
二人は貰つたお金のある中は、アラカネのもので、眞面目な奉公が出来ないで、また其を飛び出して、また其所、此所と渡り歩いつ付かなくなつて来ました。  
そこで、相談をして、芳町の桂庵から雷は軍力、安藤かわらや風の神は鐵治屋ヘフキの代りに雇はれました。

東尋棒（諸國奇談）



オデッセー達は、始度、誰で誰を旅へるやうに、その船を何處も何處も大男の目の中でねぢり廻しましたから、大男の目はぢりぢりと音をたてゝ、皆んな流れ出してしまひました。

大男は恐ろしい大きな聲で叫んで跳ね起きました。そして苦しみの爲に狂人の様になつて暴れ廻りました。併し目が見えないので、どうする事も出来ません。仕方なく洞穴の入り口に頑張つて、誰れでも逃げようとする者があれば、たゞ一箇みに拾り殺してやらう

と待機して居りました。

オデッセーは、又一つの計略考へて、山羊のお腹の所は、家來一人づゝ捕りつけました。そして洞穴から順々に外へ送り出してやりました。

オデッセー達はかうして無事に洞穴を抜け出して、分捕の山羊と一緒に、船に乗り込む事が出来ました。

財産や食物を取り上げました。併し、東尋坊は力が強い上に、薙刀の名人で、時々、薙刀を振り舞はして、ひとを殺したりするので、人は困り切つて居りました。

ところが、何か譯があつて、西京から一人

の十三四になる可愛らしい雛兒が、この東尋坊のお寺に送られて参りました。

この雛兒は、人助けのために、東尋坊を殺してしまはうと心を決めました。そして毎日、い、櫻花を窺つて居りました。

それは、春の夜のことでした。東尋坊は、



船が大部分を離れた時、オデッセーは船に立つて叫びました。  
「ボリヘマスの馬鹿男！」お前は自分の家へ来たお客様を取つて食つた天罰で、目が潰されたのだぞ！」  
この聲を聞いた大男は、カツと怒つて立つて、立つて叫びました。大岩は、彼の方に落ちました。そして山の様な大岩を抱へて来て、この聲を聞いた大男は、カツと怒つて立つて叫びました。そして山の様な大岩を抱へて来て、この聲を聞いた大男は、カツと怒つて立つて叫びました。大岩は、彼の方に落ちました。その爲に大波が起つて、船が又、もとの岸に押返へされさうになつたので、オデ

セーは驚いて、急いで船を漕ぎました。  
「ボリヘマスの大男は、一々、山羊の脊骨に觸つて見ましたが、まさかお腹に人間がくつついてゐるとは思ひつきませんでした。オデッセー達はかうして無事に洞穴を抜けて出でて、分捕の山羊と一緒に、船に乗り込む事が出来ました。

オデッセーは、かう云ふのを聞いた大男は、神に向つて、どうかこの難討つて呉れるよう」と祈りました。海の神はこの祈りを聽き入れました。オデッセーは、長い、そして苦しい航海をした後でなければ、自分の家へ歸る事が出来なかつたのです。（つづく）

東尋坊が死んだと聞いたその地方の人々は、どんなに喜こんだ事でせう。それから後、その淵をトウジンボウといふ泳き自慢の學生等が、この淵で泳ぎます。が、淵の中には、坊主の頭のやうな海月が漂ります。只今ではそのお寺もなく、また樹の木もありません。併し、東尋坊の死んだといふ淵は、今も青黒い水を湛へてゐます。夏になると、泳き自慢の學生等が、この淵で泳ぎます。が、淵の中には、坊主の頭のやうな海月が漂ります。



## 幼年詩

失名

尾校尋五

仁科あさよ

九段坂

水戸一 久米 百代

サクサクサク  
足音がする  
雪がふつてると見える  
うれしいな

評 跳つてると見えるよう  
だ(牧水)

前の烟の  
霜柱にはとりの  
足あとから  
とけていく

評 なるほどさうでさう。  
(牧水)

くだんざか  
電車が  
一しょけん命になつて  
上つてゆく  
評 ほんとにさう見えますね。  
(牧水)

かねつきだう(賞)

福岡縣下妻 井口ハスエ

いばら

まるいお月様

中村 重利

等三 藤原 丑一

かねつきだうで  
かねもつかんで  
けしきを見てる

評 春の夕暮、ナント長閑な景  
色でせう。(牧水)

いばらの  
赤實

まるいお月様

草の上に  
おちさうだ

お月様

おてんとさまは  
てる てる

雪の中を  
てらしてゐる  
評 大きなきれいな景色です。  
(牧水)

足音(賞)

霜柱

いばら

かねつきだう(賞)

立校尋四 山岸 猛

上から下へ  
とつとゝ廻そ

山を見れば吹雪  
あちらの山は  
もう天氣だぞ

ねこやなぎ

朝鮮元山公  
立校尋四 山岸 猛

みんなで揃つて  
とつとゝ廻そ

銀色の芽が出た

ひまほりく  
西むいた

赤實

ねこやなぎに

第一校尋五 岡部 豊作

お月様

銀色の芽が出た

立校尋四 山岸 猛

白く

やらかいすべっこい芽です

福島縣白河 岡部 豊作

雪の中を

かはいくなりました

立校尋四 山岸 猛

まるいお月様

評 心持のよく出でる時。

立校尋四 山岸 猛

静かな朝

松の木に

立校尋四 山岸 猛

千葉縣平 鈴木 晋治

松の木に

立校尋四 山岸 猛

静かな朝

あれ／＼ちがふ木が

立校尋四 山岸 猛

一人できたら

枝を出してゐる

立校尋四 山岸 猛

きこりの木をひく音が

先生に聞かう

立校尋四 山岸 猛

静かな山にひく

ひまはり

立校尋四 山岸 猛

時々うたが

たがまはし

立校尋四 山岸 猛

まじつて聞えた

たがを廻そ

立校尋四 山岸 猛

日はかなり上つてゐた

とつとゝ廻そ

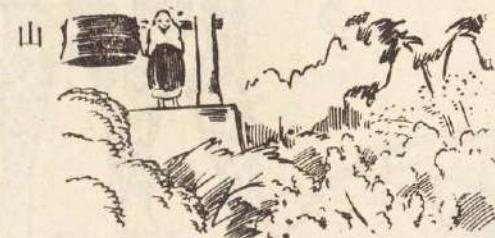
立校尋四 山岸 猛

くらいの山

みんなで廻そ

立校尋四 山岸 猛

龜岡 しげ





## ノワルの不平

久米 紘一

むかし、暑い國に、ノワルと云ふ、脊の低い男が住んで居りました。

ノワルは自分が他人よりも脊が低いと云ふ事が、

不公平で堪らなかつたのです。

「あゝあ、俺ももう少し脊が高かつたらなア。」

ノワルはよく、獨り言を云ひました。

『脊さへ高かつたら、バナナだつて、パンの實だつて、樂に取る事が出来るのに、喧嘩をしたつて、きっと勝てるんだが……』

かう考へて來ると、愈々自分の脊低くが癪にさはつて、我知らず地闘駄を踏むのでした。

或日の事、ノワルは森へ行つて見ますと、キリンに會ひました。キリンは、あの長い首を延ばして、歩る乍ら、木の若芽を食べて居たのでしたが、ノワルが近寄つて來た事も知らずに、もう少しで蹴飛ばさうとしました。

『氣をつけろ。このあき盲め。』ノワルは危く脇へ飛び退いて呶鳴りました。キリンは驚いて下を見ます

と、自分の膝程もない小男が威張つてゐるものですから、可笑しくなつてしまひました。

「おや、居たのか。」「ナニ、居たのかとは何だ。失敬な事を云ふと、この弓で射殺すぞ。」

「まあ、待て。そんなに憚てたつてしやうがない。」

「何、何だと？」ノワルはカツと怒つて、弓矢を取りなはしましたが、この男はこれでなか／＼瘦い男でしたので、この時フト思ひ返しました。

「一寸待てよ。このノツボの麒麟の奴、何か脊が高くなる法を知つてゐるかも知れない」と思ひました

ので、ノワルは顔色を和げて呼びかけました。

『キリンさん。』

『何だ、いやに柔しい聲を出したな。』

『キリンさん。お前、脊が高くなる法を知らないか。』

『脊が高くなる法？ 知つてゐるよ。』

『知つてゐる？ ちや教へて呉れないか。お禮は幾らでも出すよ。』

「よし、教へてやらう。なに、お前のお禮なんか、あてにしやしない。」

キリンはノワルを連れて、ひょこくと自分の家へやつて來ました。

キリンのお家は途方もない大きな物でした。ノワルが上へ上ると、恰度、夕飯時でしたので、キリンは戸棚から色々な物を出して、ノワルの前へ並べました。見ると、ウドだの、牛蒡だの、うどんだの、皆、長ひよろい物ばかりでした。

『さて、これを食べて寝るがよい。あしたの朝迄にはキツと脊が高くなつてゐるから。』  
ノワルは随分をかしながら呪ひましたが、云はれた通り食べて、ごろりと横になりました。  
『ちよつと、キリンさん、その窓を閉めて呉れな  
いか。ひや／＼夜氣が這入つて來ていけない。』  
『いや、なに。』キリンは頭を振つて、  
「窓は開けて置いた方がいいんだ。』と云つてどうし

ノワルは呆れ返つて居ましたが、やがて窓から潜り出で、

『どツこいしよ。』と、立上つて見ました。

すると、する／＼と忽ち頭が森の上へ出てし

さて、ノワルは森の木よりも脊が高くなつたものですから、平氣でざぶ／＼と海を渡つて隣り島へ行きました。  
處がその村では、今、隣島の兵隊が攻めて来る所ですとか、だと云つて、村中大騒ぎをしてゐました。ノワルは曾長の所へ行つて、  
『どうだ、助けてやらうか。』と云ひました。  
曾長は、ノワルの様な大男が助けて呉れると聞い



まひました。

『おやおや。』ノワルは呆れながらも大喜びで、早速、今迄碌に口にする事が出来なかつた、コーコナツツの實をもぎ取つて、美味しい汁を吸ひました。

『どうだ、助けてやらうか。』と云ひました。  
曾長は、ノワルの様な大男が助けて呉れると聞い

ても閉めて呉れません。ノワルは仕方なく、自分で窓の扉を閉めて寝ました。

## 二

あくる朝、ノワルが眼を覺しますと、もう明るくなつて、キリンは何處へ行つたのか、姿が見えませんでした。

『あーあ。』ノワルは欠伸をして、起上らうとしますと、ゴツン、と強たか額を天井にぶつけました。  
『あ痛た：：ほう痛い。』ノワルは頭をさすりながら、あたりを見廻しますと、驚きました。一晩ねた内に恐ろしく脊が伸びたと見え、頭が天井につかへて、とても出られさうもありません。おや／＼と思つて、足の方を見ますと、これは又どうした事か！  
二本の足は長く／＼例の窓から突出して、あちらの森の中に這入つて居ります。その先はどこいらに有るのか分りません。

て大喜びで『え、どうぞ、御願ひします。もし勝つ事が出来たら、私の娘を差し上ませう。そして行々はこの村の會長になつて下さい。』と云ひました。

ノワルは晩になるのを待つて、隣り村へ出かけて行きました。見ると敵の土人達は、森の際に陣取つて、篝火を焚いて居ります。

ノワルは、樹の枝を澤山もぎ取つて、自分の首に縛りつけ、恰度、立木の様に見せかけて森の際に立つて居りました。夜が明ける頃、敵の會長は、一人の土人を呼んで、ノワルの方を指さしながら、『おい、あの木に上つて、敵の様子を見てこい。』と云ひつけました。

土人はノコノコとノワルの所へやつて来て、脚へ上らうとしましたが、滑つて上れません。

『會長、なんだかこの樹は、へんに暖たかくて、つる滑つて上れません。』

『何だ、上れない？ 馬鹿、意氣地なし奴、どけ、俺が上つて見せる。』

會長はかう云つて、上らうとしましたが、つるりと滑りました。

『おや、へんな樹だな。』會長はかう云つて、いきなり槍で、ノワルの脚を突刺しました。ノワルはとても痛かつたのでしたが、チツと我慢してゐますと、會長は今度は、自分の足の裏に松脂を塗つて、漸く上り始めました。そして、ノワルの肩の所に来て、しきりと向ふ眺めてゐましたが、

『うん、敵は未だ準備も何をして居ないから、三本杉の後ろへ廻つて、不意に攻めかゝれ。』と命令して下へ降りようとしました。

ノワルは『おッとどつこい。』と、いきなり會長の兩足を掴んで、ひょい／＼と歩き出しました。

### 三

ノワルは村へ歸つて來ると、會長を皆んなの眞中に抛り出して、



れ。』と命令しました。

皆んな早速一かたまりになつて、三本杉に待伏せして居ますと、案の條、敵の土人等がやつて來ました。

『それツ。』と云ふので一度に攻めかかりますと、敵は會長が居なくなつて、ビク／＼してゐる處でしたので、一たまりもなく打負かされて逃げて行つてしまひました。

さア、この大勝利もみなノワルの御蔭だと、村中は大喜びです。早速ノワルと、會長の娘の御婚禮が行はれる事になりました。

『さア、これはおみやげだ。處で、敵の奴等は三本杉の處から攻めて來るから、あそこに待伏せして居

れ。』と命令しました。

處が何だつて物事はさう旨い事ばかりは續きません。いざ御婚禮と云ふ時になつて、會長の娘は、『私は、あんなノツボのお嫁さんになるのは嫌です。』と云ひ出しました。

### 四

そんな事云ふもんぢやない。と色々すかしましたが、どうしても聞入れません。

ノワルはそれを聞いて又悲觀しました。

「あーあ、俺は何だつて、こんなに脊が高いのだらう！」と思はず咳きました。

すると、足の下で「ふふん」と笑つた者があります。

おや、と思つて見ますと、一匹の豚が寝ころんでゐました。

「お前か、今笑つたのは。」「さうだ、俺だ。」「何だつて笑つた。」「をかしいから笑つたんだ。脊が低くなりたかつたら、私の所へ來なさい。いゝ事を教へて上げる。」

ノワルは以前のキリンの時の事を思ひ出して、豚のあとから跟いて、その家へ行きました。すると豚は、戸棚の中から、栗だの、どんぐりだの、南瓜だの、脊の低い物ばかり出してノワルに食べさせました。さて寝る時になると、豚は小さな座蒲團を出して

来て敷きました。

「なんだ、これは座蒲團ぢやないか。」

「さうだ、それしか無いんだ。」

ノワルは仕方なく、座蒲團に頭だけ乗せて、身體は野原に抛り出したまゝ眠りました。

あくる朝、ノワルが眼を覺して、あたりを見廻しますと驚きました。

一晩の内に身體が縮まつてしまつたと見え、小さな座蒲團の上に、海老の様になつてのつかつてゐるのです。

『おや／＼！』ノワルは餘りの事に、ばんやりしてしまひました。こんなになつてしまふのなら、前方がよかつたと思ひましたが、もう追つきません。麒麟を探して、又脊を伸ばして黄はうとしましたが、何處に行つたのか姿が見えません。ノワルは皆んなから、チビ／＼と嘲けられて、一生ふ／＼不公平を云ひながら不愉快に送りました。(をはり)

## 子山羊

(推薦)

岐阜縣 森 星 兒



山羊 山羊  
子山羊

なぜ啼く

子山羊

青いお空に

まだ日は高い

母さんゐなくも

ひとりで遊べ



## 少女の飛脚

霜田史光

たやうな聲をあげましたが、堀内と云はれた侍は慌てゝ彌平次の口を制して、『彌平次、江戸の下屋敷まで大至急の飛脚が頼みたいぞ。』

「へえ」

『お前も知つての通り、今お屋敷では悪人共がよからぬ企てをしてゐる。手前の主人始め忠臣達はどうかして彼等の陰謀の根を絶やすうと思つてゐるが、何にせよ悪人の頭が重役の村井殿だからうつかりな事は出来ないのだ。で、お前に頼むこの手紙も極く秘密で江戸詰の御家老様田村土佐殿にお渡しし

て貰ひたいのだ。』

『畏りました。お家の爲めになる仕事、彌平次命にかへても仕述べます。』

『申すまでもないことながら、悪人共はよく／＼我に注意してゐるから、いつ、どんな所でお前を捕へ、その手紙を奪ひ取らうと待ち構へてゐるか知れ

ますから。』

『飛脚屋の彌平次は聞き覚えのある聲だが、とは思ひましたが、それが誰であるか一寸見當がつきませんでした。然し、言葉使ひから考へて城内の相當なお侍であることはすぐに知りました。

『彌平次の娘お八重は父よりも先に眼覺めてあましたが、何んとなく物恐ろしい氣がしてちつと静まつてゐました。父の彌平次が戸を開けると、外から覆面の侍がぬつと這入つて來ました。彌平次がひとりと戸門を閉め切ると、侍はやつと安心したと云ふ風に被り物を取りました。

『おや、これは堀内の旦那様……』と彌平次は驚いた

『宜しうございます。夜が明けましたらすぐに出立いたしませう。』

『いや、氣の毒ぢやが今夜の内に出立して貰へまいか。急ぐことでもあるし、それに當宇都宮の城下を離れるまでが一番險だから。』

『それではお言葉通りすぐに支度をして出立いたしませう。』

『やがて侍は狀箱を彌平次に渡し、再び覆面をしてそつと出て行きました。

『お八重は十五の小娘でありましたが、氣性の人一倍勝れた少女でしたから、父の大役を寢床の中で聞いて、すぐ様起き出して父の支度を手傳ひました。『お父さん、お家の大事なお役目ですから、どうぞ途中は氣を付けて行つて下さい。お母さんのことは御心配なさらずに、私がお留守の間は看病して居りますから。』

「うむ、お八重吳々も頼んだよ。」

二人の話し声も秘密でした。外で誰が立聞してゐないとも限らないし、それに病床に臥してゐる母親も、今折よく眠つてゐる様子でしたから、知らさずに出立してしまはうと云ふ心算なのです。



げ、振り分け荷物の中に分らぬやうに状箱を包み込んで、そつと裏木戸から抜け出ました。

お八重は父の姿が見る間に濃い闇の中に吸ひ込まれてゆくのを見ると、燐めく星空を見上げました。氣のせぬか今夜の星はまるで惡魔の眼のやうに物凄く光り輝いて居ります。お八重は急に水に打たれたやうな怖氣が體中を走つて、慌てゝ雨戸を閉切りました。

「お父さんが御無事で江戸に着けますやうに。」

と祈るともなく呟かすには居られませんでした。

## 二

『お八重、お八重、早く開けて呉れ。』

『まさしく父の聲、お八重はがばと跳ね起きました。父を送り出してから二時間ばかり、一番鶏の鳴くのを聞いても、お八重は妙に胸騒ぎがして眠られなかつたのでした。』

これはどうしたのですか。』

氣丈なお八重は驚きながらも、氣が轉倒するやうなことはありませんでした。

『残念だ、悪人共に城下の松並木でやられた！』

『えッ、悪人共に……そして大事な状箱は？』

『これだけは……これだけは幸ひに奪はれずに持つて逃げて來た。』

お八重はほつとしました。これさへ奪はれなかつたら、又何んとか方法も立つと云ふものです。

手早く父の傷の手當をしましたが、思つたより重傷で、これではとても再び江戸にゆくことは出来ませんし、また放つて置いたらひよつとすると命にかかるかはるかと思はれる程でした。

『お八重残念だ！己れの命は無くなつても關はないが、この大事な手紙を江戸へ届けることが出来なくては、申し譯ない、申譯ない。』

父は苦しい呼吸の下から呻くやうに云ひました。

父の身に何か大變が起つた——とはすぐにお八重の直感した所です。急いで雨戸を開けると父は轉び込むやうに中に這入り、土間の上にばたりと倒れてしまひました。肩から胸へかけて一面の血！

『あッ』とお八重は驚きの聲を上げてしまひました。

『お父さん、お父さん。しつかりして下さい。一體

この役目はごく秘密で、外の飛脚に頼めないことも、お八重はよく知つてゐました。それかと云つてこの儘で済ますべきものではありません。あの堀内様のお話しの様子ではお家の大事がこの手紙にかゝつてゐるのだと、お八重は思ひました。

「お父さん、その手紙は私が……私が江戸まで持つて行きませう。」

「お八重は遂に決心して云ひました。」

「何、お前が持つてゆく……う一む。」



「お父さんは呻きました。誰にも頼むことの出来ない秘密な役目ですから、血を分けた娘に頼むことは安心ですが、それかと云つて果してこの大役が無事に仕遂げられませうか。飛脚に馴れた自分でさへ、三里と行かぬうちに悪人共の爲めにこの仕末、それを弱い小娘の身で、遠い江戸までどうして無事で行かれると思へませう。その上家には重病人の母がある。自分がこんな傷を受け、お八重が出て行つたらあとはどうなるか。」

さう考へると、彌平次は健氣な娘の言葉を聞いても、すぐにはいとも悪いとも答へることが出来なかつたのです。

「お父さん、御心配なさらずに私をやつて下さい。」

私の代りにこの状箱を持つて江戸の御家老様に届けた。家のことは、心配するな。近所の人々に頼んでお前の歸るまでは厄介になる。」

「はい、参ります。どうぞ私が歸つて來るまで待つておいで下さい。」

その時、病床の母親は這ふやうにして出て来ました。眼には一杯の涙を泛べてゐます。



「お八重、大恩ある殿様のお爲めです。一生に一度の御奉公と思つて、お父さんの代りになつて上げてお呉れ。私達のことは決して心配おしでない。それに只の妻では道中が危いから、私が若い時に着て出た順禮の衣裳があるからあれを着てお出で。」

お八重は母の言葉に感激し、益々勇氣づけられて急速に支度を調へました。そのうち夜も明けて来ましたので、隣家の人に父母の事を呉々も頼み、自分は順禮に妻を變へて江戸に向けて出立いたしました。

却つてお父さんより人に怪しまれずに済むかも知れません。だけど、お父さんのお怪我や、お母さんの御病氣……」

お八重の折角の決心もにぶりさうになりました。その時父親はきつと決心したらしく、

「お八重、よく云つて呉れた。行つて呉れ、どうか

城下はづれの松並木——父のことを思ひ出しただ  
けでもぞつとします。お八重が通り掛つた時、真紅  
な太陽が東の雲間を破つて、地に黄金の光を投げま  
した。昨夜この松並木で血を流すやうな惨劇が行は  
れたとは思へぬ程、太陽の光は平和に満ちて居りま  
した。



「これ／＼娘。お前は何處へ行く。」

とある茶店の中からバラ／＼と飛び出して來た武士五人、これこそ悪人共の手下となつて此處に見張りをしてゐるものだな、とお八重はすぐに気が付きました。

「はい、私は父母を尋ねて西國順禮に参る者でございます。」

「それに相違あるまいな、うむ……中々よい娘だ、どうだ茶店の中で一休みして行かぬか。お美味しい菓子もあるぞ。」

一人の若侍が笑ひながら云ひ出すると、中年の侍はそれを遮るやうに、「貴公冗談は止したまへ。さあ／＼順禮早く行くがよい。」

「有難うござります。」

お八重はほつとして小走りに駆け出しました。先づ

然し、お八重が父母を喜ばせようと思つて五日目に歸つて來た時に、彼女の家の中には一體どんな場面が展開されてゐたでせうか。

悲しみの限り——いゝえ、こんな言葉では表はすこと出来ません。父も母も、あゝ何んと云ふ悲惨な結果になつたのでせう。二つの葬式は一緒に出

ばかりになつてゐました。

お八重の悲嘆はどんなで、つたでせうか。臨終の水を取ることの出来なかつた不孝と不幸を嘆いても悲しんでも盡きませんでした。

お八重はその手柄を讀められ、重役からは澤山のお褒美を戴きました。

「こんな物をいくら戴いたつて、お父さんとお母さんを亡くしては、……あ。」

お八重の苦心は空しくありませんでした。小娘の順禮姿は誰にも怪しまれず、その上數々の同情さへ集つて、この大役を無事に仕終せることが出来たのであります。



# 月光酒

吉田一穂

八八



コットン、コットンと水車場では、朝はやくから、米つきはなれで米をついてゐました。お百姓の蟻は、汗を流してひいてきた重い俵を、小舎の前へおろすと、戸を叩きました。

「今日は」

「早くから、よく精がでますな」といひながら、主人の蟻が出てきました。

「なあにお互様、働くのは結構なことで。」

「遊んであれば何か悪い考へも起きますが、仕事

達も、毎日、方々を飛びまはつては蜜を集め、今ちやどの酒庫も一杯ださうです。」

「その上、今年の酒はまた大變よく出来たつてぢやありませんか。」

下からの話聲に耳をたててゐた蝙蝠は、その話のなかに、ふと『酒』といふ言葉をきいてぱつちり目をさました。なぜなら、彼の一一番すきなものは

そのお酒であつたから。

『ではごめんどうでも、また一つ米をついて置いて下さい。』かう頼んで、空ら車をひいた蟻の百姓が歸ると間もなく、またコットンコットンと水車が、威勢よく米をつき始めました。

に懸命だと辛い事も忘れてします。』などと一人は話しあつてゐました。

『なんとうるさい奴らだらう』と呟いて、また寝返りをうつた屋根裏の蝙蝠は、毎朝かうした下からの百姓と主人との話聲に目をさまされるのでした。今朝もまた彼は、さくともなしに耳についた話を聞いてゐました。

『だが蟻さん、私百姓にくらべて、あのお嬢夫人は、毎日きれいな着物をきてフラフラ遊んでゐられるから幸福なものですね。』

『滅相もない蟻さん。あれで夫人は蠶になつて糸も紡ぐし、また衣を染める色を花から絞つたり、みな自分の手一つでやるんだから、他目で見るやうな暇があるわけでもないんですよ』といった蟻の言葉

が、日がな一日、暗い屋根裏にねこころがつて少しも働かうとしない蝙蝠の胸を、チクリとさしました。

『するとみんな働いてゐるのでですね、あの蜜蜂さん

二

蜜蜂の酒の話を、屋根裏で盗み聞いた蝙蝠は、その美味しい酒に舌鼓うつ方法を考へてゐました。

彼は元來、非常ななまけもので、額に汗して働く

八九

うなどとは、夢にも思はず、いつも暗い唐裏にかく  
れて、悪い事ばかり考へめぐらしてゐました。です  
から外へ出ても、誰れ一人、彼れを相手にするもの  
がありません。例へ、この日中、どんな嘘をついた  
にしても、蜜蜂から酒をまきあげる事が出来ません。  
もし、めつたな事でもしやうものなら、あの痴癡持  
ちな蜜蜂は、ブンブン怒つて、きっと鋭い槍でつき  
さすに違ひない。と思つた彼れは、夜、こつそり出  
かけて、盜みとるよりほかに仕方がない、と悪い考  
へを起しました。彼れは、またゴロリと横になつ  
て、日の暮れるまで、グツスリと寝込んでしまひま  
した。

## 三

蝙蝠が目をさました時、あたりは暗く、水車の音  
も止んではつそり美しい月が出てゐました。

彼れが身仕度をして、庇の破口からぬけ出やうと

する、恰度その眞ん前に、蜘蛛が巣を張つてゐまし  
た。

「おい！ 誰れに断つて俺の出口へなんぞ店を出し  
たんだい」と彼れは、いきなり腹を立てて、呶鳴り  
つけました。

「ごめんなさい。別に悪氣があつての事ぢやなかつ  
たんですから」と蜘蛛は、びつくりして詫ひいりま  
した。

「黙れ！ さつさと形付けちまひな。」

『宵のうちから、勢出して折角はつたのですから、  
今晚だけ、どうか勘辨して下さい。』と蜘蛛は、宵の  
商賣を目の前にして店も疊まれず、いくともお願ひ  
しました。が、蝙蝠はなかなか許してくれません。  
『よし形付けなけれあ、俺がぶつ壊してやる』と彼  
れはさつと羽搏いて、蜘蛛が苦心の網をつき破つて  
ぶいと外へ飛び出してゆきました。

『なんて情けない奴だ。俺があれほど半蜘蛛になつ  
てあやまつたのに、よし、おばえてゐろ、畜生！』  
と蜘蛛は、代無しにされたボロボロの網にとりすが  
つて、口惜しさうに叫びました。

## 四

冷たい夜氣にふれて、ほつとした蝙蝠は、身に覺  
えの早業で、暫間よく考へて置いた蜜蜂小舎へ、酒  
を盜みとりに行かうとしてゐました。

彼れは空を千鳥に飛んで、ひよいと宙がへり、蜜  
蜂小舎の後の方へ廻つて、要心ふかく中の様子を探  
りました。一日の働きに疲れ、グツスリと眠つた様  
子を覗いて、彼れは四角な入口から、ぬき足、さし  
足、中へ忍び入りました。そして、すらりと並んだ  
六角形の酒庫の前へ近よつてゆきました。

花の種類によつて分けた酒庫の扉には、いちいち  
堅く花の封印がしてありました。彼れは一番おいしい  
酒をと、まづ『薔薇』の庫を擇んで、その高い庇



へ両肩の爪をひつかけました。口をつけて封印を切らうとする鼻さきへ、ブーンといゝ香りが匂ひました。彼れは夢中になつて、カナリと歯を入れた時、折り悪しく両脚の爪が、下に眠る番兵の體へさはつたので、蜂はびっくり目をさましました。見ると、すぐ真上に黒い魔物が、しがみついてチューチュー



## 五

酒を啜つてゐるではありませんか。蜂はすばやく飛び立つや否や、その曲者の脊へ一本チクリと槍を突きさすと一緒に『泥棒』と呼びました。さあ大變、蜂の巣は速かに騒ぎ立つて、一時に幾百と數知れない蜂の群れが、ブンブン槍をしごいて、どつと、この怪しい盜賊を攻めつけました。流石・術策に秀でた蝙蝠も、四方に敵を受けてはかなひません。とまどひしながら、散々に傷を負つて、やうやく戸口から、

「泥棒蝙蝠、出て失せろ！あしたの朝を要心しな」といふ罵倒と一緒に、外へはふり出されました。



りました。彼れはヒシヒシ・痛む體をこらへて、藁くづを集め、破目板をふさいだりして明日の敵に備へました。しかし蜂は、どんな小さい穴からでも入つて来るに違ひない。彼れは新らしいまたの痛手

にふるへながら、ふと先刻の蜘蛛のことを思ひ出しました。そして脇先きへそつと頭を出して悲しげに蜘蛛を呼びました。

「おい蜘蛛さん。せひ一つお願ひがある。」「なんだい。」蜘蛛はスーと絲をたれて彼の目の前にぶらさがりました。

「いそいでこへら一杯に巣を張つてもらひたいんだ」と蝙蝠は哀れつぽい聲で頼みました。

「もらひたいもないもんだ。先刻の仕うちを忘れたのか。」と蜘蛛は憎々しげに云ひました。

「いや俺が悪かつた。實はあした攻めてくる蜂を防ぐために、せひ君の網の力を借りたいのだ。どうか助けてくれ、たのむ。」

「それや面白い。あすは高見の見物とでかけるかな。だが君の願ひは眞平だ。」と蜘蛛は嘲笑つて、また庇の上へスルスル登つてゆきました。

## 六

その翌日、蜂のためによほど酷い目に會されたと見えて、蝙蝠はそのまま屋根裏にとちこもつて、うんうんなり続けてゐました。

傷の癒ゆるのを待つて寝てゐた蝙蝠は、ある日、枕元へひいてくる、下からの百姓の蟻と水車屋の蟻との話聲をきいてゐました。

『蜘蛛さんからの話ですが、蜜蜂の酒を盗みに行つて蝙蝠が酷い目に會つたさうですな』呑氣さうな蟻の聲がきこえました。

『どうも屋根裏の先生には弱りましたよ』と恐れ入つて頭でも搔いてる様な性のいゝ蟻の聲がしました。

『あんな奴は早くおっぱり出したがいいですよ。』と云つた蟻の聲がピンとひきました。

『それも可哀想ですからな。』

「どうして香水を作つたのでせう。」

『始め誰れも知らなかつたが、蜜蜂さんがちよいと

囁んでみて、これや晝喰く花の匂ひぢやないと云ひ

出したのです。あれで彼はなかなか詳しい草木學者ですかね。』

『ではどんな花から採つたのですか。』

『月見草です。夜の者は夜道が明るいつて譯であ

ね』と蟻が云ひました。

『ウムなるほどな。家の先生も夜の者が、一つ螢にならつて、お月様から銀の酒でも作り出せあいの

ですがな。ウムなるほどな。』

と蟻はしきりに感心してゐる様子でした。

『さうすれば奴だつて有名な學者にもなるし、他の

邪魔にならない商賣が出来やうつて云ふわけですが

な。』と蟻の同意する聲がきこえました。

『全くだ！ ブラ／＼遊んでゐる者を悪い事から教

ふ道は、一つの仕事を與へる外にないんだ』と蟻

『でも小學讀本にある通り、仲間はづれの蝙蝠つて、昔から惡者に相場がきまつてますからね。』

『いやそれがいけない。頭つからさう悪い奴だときめて放つて置けば、なほ惡くなるばかりです。先生にとつて一番いけないのは、正しい商賣が無い事なのです。あれでもきまつた仕事があれば、他様に迷惑をかけるやうな、悪い考へを持つ暇がありません』と蟻は、不幸な蝙蝠のために辯解をしてゐました。

『真個です。あのお蝶夫人だつて、また螢さんだつて、遊んでるやうですが、みなそれの仕事を持つてるんですからな。』と蟻は、正直な百姓らしく同意しました。

『螢さんの事は初耳でしたな。一體どんな商賣を始めたのです。』と蟻がたゞねました。

『香水を作つて賣り出したら、それがまた素的に評判がよくつて。』

## 七

『さうだ、俺も何か一つ仕事を始めやう。』

屋根裏の蝙蝠は、百姓と水車屋の話から考へながら、今までの悪かつた自分の行ひを悔いました。

螢は月見草からさへ香水を作り出したのだもの、美しい月の光から、銀の酒が醸り出されぬ譯はない、と彼は思ひました。

その夜から蝙蝠は、昔の鍊金術士のやうに、庇からさしむ月の青い光を、三稜鏡で分析したり、キラ／＼滴る松の蜜や薔薇の露を、ラスコや試験管にとり入れて、熱心にその研究を續けました。

やがて彼は、月光から思ひ通りの美味しい酒を作り出事が出来るやせうすると、多分いつも蝙蝠といふものは、その不思議な月光酒の媚薬を飲んで生きてゐる事が出来るやうになるだらうと思ひます。

# ベルベットツボト一郎政二島小



九六

大昔、東の方の或島に、それはそ  
れは美しいエーラ姫と云ふ王女様が  
住んで入らつしやいました。美しい  
ばかりか、心の大變優しい方だつた  
ので、方々の王子様方から、お嫁さ  
んに欲しいと云ふお申込みがたんと  
たんとありました。併しエーラ姫は  
そんなお申込みには一向無頓着で、  
たゞ／＼黃いベルベットボートばかり  
を可愛がつて入らつしやいました。  
一體ベルベットボート云ふのは何  
だか御存じ？

虎よ、

尤も、その頃は——大昔ですよ。  
獸のうちで一番愚しいものは猫下し

た。その次が鬼。その次は犬。一番弱いのがライオンと虎で、虎は千里の藪を走る元氣なんなくて、家に飼はれて囁き聲も優しく、ミューノーと云つてゐました。その中でも、このエーラ姫に可愛がられてゐたベルベットボートは、パツチリとした黒目で、毛の柔さはまるで絹のやう、而も長く、エーラ姫が撫でおやりになると、毛の中へ指が隠れてしまふ程でした。

すると、この虎を可愛がると云ふ風習が、貴族の間にも流行して、どんな貴族のところにだつて虎の一匹や二匹飼つてないなんて云ふ家はありませんでした。その上、耳に寶石を飾つたり、前足二本に腕環を嵌めたり、高いカーテンを附けたりして飾り立てました。虎は柔い羽根蒲團や襦子の上にでなければ寝かされませんでした。物を食べさせるにも、金や銀のお皿を用ひ、特に虎のために下男や下女が雇はれました。

すると、それを見た普通の人民達までも、虎を飼ふ事を眞似し出しました。併しこの方は、寶石の代りに南京玉で飾り立て、金銀のお皿の代りに瀬戸のお皿で食事をやりました。

兎に角、その島は、虎にとつて全く極樂でした。法律があつて、虎を殺すと死刑に處せられましたから、誰も虎一つ掛ける者もありませんでした。ですから、素晴らしい勢いでドン／＼殖えて行つて、至るところで虎が群れて遊んでゐました。

そのお蔭で、この島の人達は、夜提灯を持たずに入外へ出ても、どこへ行つても虎の目がらん／＼と光つてゐるので、暗くて困るなんて云ふ事はありませんでした。町筋でも光つてゐるし、屋根の上からも光つて來る、藪の中からビカリ／＼光つて來るかと思ふ、樹の梢でも光つてゐる、足許の石の間に光つてゐる……まるでお星様のやうでした。

こんな工合で、エーラ姫をはじめ、この島の人民

達はみんな幸福に暮してゐました。ところが、ここに一つの不幸が見舞つて來ました。

## 二

或朝、突然一本の魔法使がエーラ姫を尋ねて來ました。眞白な髪が瀧のやうに床まで垂れたお爺さんで、何でもこの世に百二十年生きてゐると云ふ事です。目が一つで、山猫の目のやうに耀いてゐました。頭には、三尺もあらうと云ふ三角帽を被り、眞黒な着物には小さな金鈴が澤山附いてゐて、ビヨンビヨン一本足で飛んで歩く度に、チャラン／＼鳴りました。痩せた肩の上には、梟と鳥とが氣味悪い目を光らして棲つてゐました。

「王女様に申し上げます」と、魔法使が恭々しく一禮をすると、着物の鈴がチャラン／＼と鳴りました。「恐れながら、今朝早く王女様のお身の上を占ひましたところ、近々に不幸な目に逢ひになる兆がで

ざいます。それを除くのには、空色の虎をお飼ひになるより外に道はございません。急いでお探しになりますやうに。」

かう云つたかと思ふと、また一禮をするが早いか、一本足の魔法使はドン／＼歸つて行つてしまひました。もつと詳しく聞かうとして後を追はせて探させましたが、どこへ行つたやら、どこに住んでゐるやら、皆目行方が分りませんでした。

兎に角、空色の虎を探さなければならぬ、と云ふので、國中は上を下への大騒ぎになりました。總理大臣の命令で、御殿の屋根の上から床の下まで探し廻つて見ましたが、黃い虎はあても、空色の虎にどこにも見當りませんでした。街の辻、村の道、至るところに「空色の虎を探し出して連れて來た者は莫大の褒美を與へる」と云ふ貼出をしましたが、誰もつて、連れて來る者はありませんでした。



した。そこで、軍隊に命じて一匹づつ生れた子供の毛色を、

『黄色か。』

『空色か。』と調べて廻らせましたが、皆黄色ばかりでした。

エーラ姫は、幾ら待つても、一向空色の虎が現れて来ないので、目に見えて日に日に瘦せて入らしやいました。しまひには、お食事も喉を通らなくなりました。

そこで、大臣方をお集めになつて御前會議をお開きになつた末に、とうく『空色の虎を探し出して來た者は聟に迎へる』と云ふお布令を出しになりました。

エーラ姫をお嫁さんに欲しいと云つてゐた王子達の間には、非常な騒ぎが起りました。我こそは」と皆先を争って旅に出たのですから、この地球が固まって以來、こんなに地球の表面を人の動き

廻つた事はないさうです。馬は疲れるし、馬車は餘り人を乗せ過ぎてひっくり返るし、船は沈むし、中には風船に乗つて空を飛んで行つた者もありました。併し誰一人空色の虎を見たと云ふ者はすらありませんでした。

間もなく、一年は空しく経つてしまひました。エーラ姫は影のやうに瘦せて、一日は一日と氣六ヶ敷くおなりになるばかりでした。この節では、ちよつとでも氣に障る者があると、片端から死刑にお處しになりました。

幾ら待つても、誰も空色の虎を連れ來る者がないものですから、姫はもう待ち切れなくおなりになつたのでせう。或朝、人民達が目をさまして見ると、役所の壁に、

『明日から毎日十人づつ、イロハ順で死刑に處す』と云ふお布令が貼り出されてゐるのに膽を潰しました。これは、空色の虎が見つかるまで續くものと心なつてゐたのでした。

### 三



得よ」とも書いてありました。

『わあ』と云ふ悲しみの聲が國中に上りました。みんなの零す涙が川に流れ入つて、此處でも彼處でも洪

水が起きました。

その時一人の若者が、みんなを救ふ決心をしました。名をブレスロと云ひましたが、急いで總理大臣にお目にかかりたいと申し入れて、

『陛下』と小聲になつて、何か耳に囁きました。すると、大臣は、

『成程、それは忝い。どうやつて見て下さい』と、今まで心配で沈んでいた顔を、急にニコニ笑つて見せました。それもそ

『あら。』

見ると、お胸の上に、あれ程探して探し抜いて入

らつした空色の虎が、載つてゐるではありますか。

『まあ、嬉しい。』と思はず姫は頬擦りをなさいました  
たが、すぐ呼鈴の索をお引きになつたので、忽ちの  
うちに御殿中が呼び立てられ、喜びに浮き立ちまし  
た。

やがて、お化粧をすませてお居間へお這入りにな  
ると、そこには總理大臣が、ブレスロを連れて控へ  
てをりました。

『殿下、この方が、とても人の近寄れないやうな洞  
穴の奥へ這入つて行つて、探し當てて來てくれまし  
たのでござります。』

かう云つて大臣は平伏致しました。それにつれて  
ブレスロも最敬禮を致しました。

一本當に有り難う。お禮を申しますよ。』と、エーラ  
姫は二年振で美しい笑顔をお見せになりました。す  
ると、不思議な事に、瞬くうちに瘦せも素通りにお  
直りになり、昔、やうな元氣な美しい王女様におな

りになりました。

お約束に従つて、ブレスロは王女のお聟様にきま

つて、その日のうちに立派な御婚禮の式が行はれま  
した。その御宴會の間も、空色の虎はしじうエーラ  
姫のお膝の上を離れずに可愛がられてゐました。イ  
ロハ順に命拾ひをした人民達はどんなに喜んだ事で  
せう。行列を作つて、御殿のお庭の中まで這入つて  
来て、

『萬歳』『萬歳』と唱へました。

これで済めば何の事もなかつたのですが、空色の  
虎まで御婚禮の喜びに浮かれて、夜更にお庭に出て  
仲間と踊を踊つてゐるうちに、足を踏みはづしてお  
池の中へドブーンと落ち込みました。アツブー／＼泳  
いでやつと陸へ這ひ上つたところを見ると、おやお  
や、今まで空色だつた毛並が黄色に變つて、どこか  
に見覚えがあるやうな……。さう／＼、昔エーラ姫  
のお氣に入りだつたペルベットボーでした。



ペルベットボーは寒さに顎へながら、姫のお部屋  
へ這入つてミユー／＼啼いてゐました。すると、や  
がて姫は目をおさましになつて、

『アラ、アラ、アラ。』と目を丸くして驚いて居らつし

やいましたが、やがてお聟さんのブレスロに向つて、  
『よくも／＼私をお瞞しになりましたね。』と恐い顔

をなさいました。併しブレスロは一向平氣で、

『姫、空色の虎なんて云ふものは、世界中探したつ  
てありやしませんよ。併し無いと云つて放つて置け  
ば、國中の人がみんな殺されてしまふ。貴女は心配  
のために瘦せて死んでしまふ。それを救はうと思つ  
て、私の考へた計略なんですよ。そのお蔭で、人民  
は助かるし、貴女もこんなに丈夫に美しくなつたん  
ちやありませんか。』

さう云はれて、姫は初めて魔法使の云つた言葉を  
信じた自分の間違つてゐた事を知りました。その後、  
二人は仲よく、國を平和に治めました。(をはり)



童謡  
(子供篇)

竹馬たけうま  
竹キリたけきり  
竹キリテたけきりて  
アソブノヨアソブノヨ

ひばりひばり  
ひばりのこゑはひばりのこゑは  
大きいな大きいな  
高いお空に高いお空に  
上つても上つても  
こゑはやつぱりこゑはやつぱり  
大きいな大きいな

坊やはだんまり坊やはだんまり  
さびしいにさびしいに  
知らん顔しらん顔しちやしちや  
搖り有す揺り有す  
ねんねん子守ねんねん子守  
おし娘おし娘

とんぼとんぼ  
とんぼーとんぼー  
垣根がきねにとまとると垣根にとまとると  
赤とんぼ赤とんぼ  
雀くじゃくが食べる雀が食べる  
青葉せいようにとまとると青葉にとまとると  
知らぬが佛しらぬが佛の頭あたまにとまれ頭にとまれ

猿田さるた仁じん  
秋田あきた村むら岩谷いわや真三まさん

野口雨情選

竹キリたけきり  
竹キリテたけきりて  
チヨキリチヨキリ  
チヨキリテチヨキリテ  
タケヲキリテタケヲキリテ  
ナンニスルナンニスル

上田うえだ一美いちみ

ひばりひばり  
ひばりのこゑはひばりのこゑは  
大きいな大きいな  
高いお空に高いお空に  
上つても上つても  
こゑはやつぱりこゑはやつぱり  
大きいな大きいな

公子こじょ  
萬田校まつだこう海達かいだつ

雪ゆき  
雪ゆき  
朝寝坊あさねぼう

かけだせかけだせ  
どんとんどんとん  
にげだせにげだせ  
どんとんどんとん

とんぼとんぼ  
とんぼーとんぼー  
垣根がきねにとまとると垣根にとまとると  
赤とんぼ赤とんぼ  
雀くじゃくが食べる雀が食べる  
青葉せいようにとまとると青葉にとまとると  
知らぬが佛しらぬが佛の頭あたまにとまれ頭にとまれ

お地藏様おぢぞうさま

香川縣高松 中村 速生

朝寝坊あさねぼう

公子こじょ

とんぼとんぼ

野中の野中

のなか

一本道の一本道

のひんどう

お地藏さん

おぢぞうさん

いつからひとり

いつまでひとり

あらけ馬あらけま

長野縣南坂春六 小林マリミ

うちのお馬はあらけ馬うちのお馬はあらけま

あらけてる

うちのお馬は

大工のやうだ

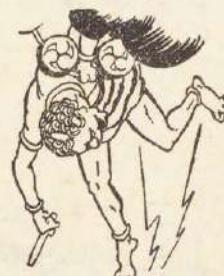
まだねむい



2



3



## 小

## 雷

(推 薦)

一〇六

## 荒井正巳

宇多行方國(今の磐城國相馬郡)大野村黒木の里から少し離れた小高い所に、お諫訪の森といふ森があります。この森の中で一番高い樹は、お諫訪の杉と言つて、その梢はこの國の何處からも見ることが出来る程の大木で、この國で一番高いといふ杉の樹です。

すつと大昔、この邊に大海嘯があつた時、この大杉の梢だけが水の中に没しなかつたさうで、その時舟を繋いた櫓が、今でもその梢に残つてゐると云ふ、この近所の人々の話です。今その根本に行つて見ますと、長い年月の間のことですから、雷に打たれたと見えて、その幹は半分に裂けてしまつて居りますが、それでも人が十人も手を合せなくしては開めない程で、その繁つてゐる枝々のために、太陽の光が遮られて、晝でも夕暮のやうに薄暗くて氣味の悪い程です。

昔この杉の根もとに、一人のお爺さんが住んで居りました。大層人のいゝお爺さんで、黒木の里の人々は、皆「お諫訪の爺さん」「お諫訪の爺さん」と云つて、このお爺さんが大好きでした。

ある真夏の夕立あがりのことでした。雲の隙間からは明るい太陽の光が漏れて居りましたが、それでも未だ遠退た雷の鳴る音が微に聞えて居りました。お爺さんはそろく風呂の水でも汲みにとりかへらうかと思つて、井戸へやつて來ました。そして何氣なく桿釣瓶に手をかけて水を汲もうとしますと、何時もは軽々と上る筈の釣瓶が、どうしても重くてもちあがらません。

「これは一體どうした事だらう。」

とお爺さんは不思議に思つて、獨語を言ひながら井戸の中を覗いて見ました。するとこの時でした。突然井戸の中から、

「お爺さん、あげて下さい。」

と云ふ子供の聲が聞えてきました。お爺さんは吃驚してしまつて、呆然として居りますと、又井戸の中から聲がして申しました。

「私はかうして釣瓶につかまつて居ますから、お爺さんはたゞひつぱりあげてくれさへすればいいんですよ。」

かう言はれてお爺さんは、やつと我にかへり急いで釣瓶に手をかけて、

一生懸命ひつぱりあげようとしました。けれどもその重いことを言った  
ら、大人も及ばない位です。お爺さんは汗びつしよりになつて、辛つと  
釣瓶をひきあげて、ほつと一息つきながら、今ひきあげに子供を見たとき  
に、二度吃驚しました。それも  
その善です。それは僅か二尺  
ばかりきりない頭に一本



4



の角を生やし、虎の  
皮の揮をしめ、左手  
に小太鼓をもつた一疋の小  
鬼だつたのです。

するとこの小鬼は、驚いて呆然としてゐるお爺さんに禮も言はずに、暫  
く黙つて凝と空を覗めて居りましたが、やがて溜息をつきながら、お爺  
さんに向つて言ひました。

「お爺さん、困つてしまひました。」

その様子が如何にも當惑さうに見えるので、お爺さんも何だかこの小  
鬼が可哀さうになつて來て訊ねました。

「困つた事になつたつて一體どうしたわけだね。」

「空に歸れなくなつてしまつたんです。」

小鬼のこの返事に、お爺さんはなほわけがわからなくなつて、訊きか  
へしました。

「空に歸るつてお前さんは一體何だね。」

すると小鬼は、左手にもつてゐた小太鼓を示しながら申しました。

「これを知らないんですね。私は小雷なんですよ。」

「いやー、お前さんは小雷かね。雷つて言へば高いところにきり落

ちないものと聞いてゐたが、どうして又井戸になんか落ちこちたんだね。」

え、實は一寸お諫訪の杉に休まうと思つて、雷雲から下りて來たの

でしたが、つひすべり落ちてしまつたのです。」

「しかし、どう云ふわけ、空に歸れなくなつたのだね。」

「もうすつかり電光が消えてしまったからですよ。私は電光に傳つて空  
へ昇つたり降りたりするんですが、かうすつかり空が晴れてしまつては、  
もう當分空へ歸るわけにはゆかなくなつてしまひました。こん度の雷雨



5

があるまで、しばらく下界に待つてゐなければならぬのです。お爺さん、お願ひですかから何卒それまでお爺さんの家に泊めて戴けませんか。」  
これを聞いて、元来親切で、おまけに毎日一人で寂しく暮してゐるお爺さんのことですから、すつかり喜んで申しました。

「あゝ、いゝとも、何時までもゆつくりして行くがいい。大した御馳走も出来ないが、お酒ならいくらでもあるから。」  
かうして小雷は、しばらくお爺さんの家に厄介になることになりました。

夕飯がすみますと、お爺さんは自慢の瓢箪から酒を注いで小雷と一緒に飲みながら、小雷の雲の上のお話を夢中になつて聞き入りました。そしてその擧句、小雷はお爺さんに向つてこんなことを申しました。

『どうですか、お爺さん、私と一緒に空に昇つて見ませんか。随分面白いことがありますよ』

これを聞いてお爺さんは、飛び立つばかりに喜びました。

『本當かね、本當だとしたらこんな嬉しいことはない。だがどうして昇つたらいだらう。』すると小雷は平氣で答へました。

『ナニ雑作が無いんですよ。私の背中に負さりさへすれば、瞬く間に空に昇つてしまひますよ。』これを聞いてから、お爺さんはすつかり空に立たちあがりながら、お爺さんに向つて申しました。

『お爺さん、では今度の電光で發つことにします。さあ用意しませう。』  
そこでお爺さんは、急いで床柱に懸けておいた瓢箪をもつて来て腰に結びつけると、小雷と一緒に縁側に出ました。もうこの時には、夕立も真盛りになつて、白煙をあげながら降る雨脚のために、五六間前も見えない位でした。

『さあ、負さりなさい。』  
かう言つて、小雷がお爺さんの前に蹲りますと、お爺さんは急いで小雷の背中に凭しかりました。この時です。ピカツといつて、盡でも暗いお諒訪の森中が眞晝のやうに明るく照されて、又元の薄暗闇にかはりましたたゞ遠くの空の方で、小雷が雲の上に昇つて行きながら打つ小太鼓の音が、ゴロ／＼と聞えてくるばかりでした。

日がすつかり暮れて、四邊が眞闇になつてしまつた頃、黒木からお諒





訪の森へ行く小路には、赤い提灯の影がいくつも續きました。未だすつかり雨が乾ききらない路傍の草々は、その葉末の露が提灯の灯のためにキラ／＼と耀いて居りました。

『お諏訪の杉に雷が落ちたんだつてよ。』

『可哀さうに、お爺さんは雷に打たれて死んだんでないか。』

『兎に角早く行つて見べえ。』 提灯をもつてお諏訪の森の方へ走つて行く義をつけた人影が、こんなことを囁き合ひました。

黒木の里の人々がお諏訪の森にかけつけて見ますと、大きなお諏訪の杉が、雷が落ちたために真中から二つに裂けてゐるので、皆アツと云つて驚きました。そして皆が急いでお爺さんの家にかけつけた時には、もうお爺さんは瓢箪を腰にしたまゝ縁側に倒れて居りました。

『まあ氣の毒だこと。』

『でもまあこの顔を御覽よ。まるで何か嬉しいことでもあるやうに、ニコニコしてゐるでねえか。』

『本當によ、村でお葬式出することにすべえか。』

人々は提灯をもつて、お爺さんのまはりをとりかこみながら、こんなことを囁き合ひました。けれど一人として、お爺さんの魂は小雷と一緒に、雲の上に昇つたことを知つてゐる人はありませんでした。



# 吉融寺小

## 舌切り雀 ュ幕

## 第一幕 おちいさんの家

幕があさります。舞臺には、べつになんにも道具らしいものがありません。座ぶとんが一枚下手にあるきり。中央におちいさんが。これから山に柴刈りにゆく仕度をしておます。着物の帶をしめてゐるところです。下に鎌や刈つた柴をのせる道具や、烟草入れや、わらざがおいてあります。おちいさんは、尋常五六年の男の子の役、そばに雀が坐つて、おちいさんの手拭を玩弄してゐます。雀は尋常二三年の女の子、雀のお面をつけます。

雀。チウ、チウ（と云ひながら遊んでゐる）  
ちい。（雀を見ながら帶をしめて）かはい／＼なア、お前は、手拭はおもちやにしてもいいけれど、鎌にさはつてはいけないよ。怪我をするから。そのビカビカ光つてゐるところが、けんのんなところなんだ。決してさはるもんぢやないよ。手拭なら、いくら引き裂いてもかまひはしないが。（ト云ひつゝ腰巾をかぶる）

ちい。アイヨ、これからだよ（ト云ひつゝしゃがんでわらぢをはく）  
ちあ。なにをぐつ／＼してゐるのよ。また此の雀といふ話ををしてゐたんでせう。ほんとに此の雀といつたら、朝は早くからとんできて、チユチユチユチユさわぎたて、うるさいつたら、にくいつたらありやしない。  
ちい。（わらぢをはきつゝ）おい／＼ばあさん。こんなかあい／＼小さなものを、にくいなんてひどい口をききなさんな。  
ばあ。おちいさんがソンなことをいふから、つけ上つて毎日々々遊びにくるのよ。  
ちい。いぢやないか。子供といふものゝ、一人もないこゝの家だもの。私は丸で此の子を自分の子供の儀に思ふのだよ。  
ばあ、この子ですつて？　まあいやだ、まるで人間あつかひね。

雀。チウ、チウ（トちいさんの顔を見る）

ちい。（柴をのせる道具を背中に結びつゝ）ハラ（トそちらを見まはし。）今日もいゝお天氣だ、お天氣にもいろいろあるが、此の春のボカボカしてゐる時くらゐ、長閑でのんびりする時はないねえ。

雀。（養成だと、ふようによ）チウ、チウ。

ちい。お前さん達でもさうだらう、いや、私だちよりも、すつと春がいゝと思ふだらう。私達はこんな家のなかで住んでゐるが、お前さん達の住家となると、屋根がないから、冬は雪がふる。秋は嵐が吹くからねえ、お前さん達の方が、もつと時候のかはりがこたへるだらうよ。（ト云ひつゝ雀から手拭を取り、腰にたれ、鎌も腰にさす）

雀。チウ、チウ（トちいさんに手つだふ）

ト下手からばあさん（尋常五六年の女の子）の役が出てくる  
ばあ。まあ、おちいさんは、まだ出て行かなかつたの（ト立つたまゝいふ）

ちい。人間あつかひにしてはいけないのかい。（ト云ひつゝ腰にもたれ雀をあやして）然し、かあい／＼もんぢやないか。

ばあ。おちいさんは、この雀の事のはかはなんにも考へないのでせう。（ト云つて坐る）  
ちい。なるほど、さう云へばさうだ。私は朝から晩まで、この子の事よ、ほか、なんにも考へたことがない。

ばあ。（笑れて）また此の子だつて……さあ／＼もう柴を刈りに行つて下さいな。

ちい。（立上りつゝ）では行きませうかな。

雀。（ちいさんの着物を引つぱり）チウ／＼。

ちい。え、な、なにか用かい？  
ばあ。（立上り）早く行きなさいつてば。  
ちい。（雀が片手に烟草入れを持って出でて）おへさうかい煙草入れかい？　ばあさん。怒るさんな、煙草入れを、忘れたと云つてくれるんだよ、これを忘



トばあさん、下手に入る。雀こはく後からついて入る。

スカ、チウ……と泣く聲一聲、上手から、おちいさんが柴を刈つて歸つてくる。

ちい。今、歸つたよ。おや、雀はどこに行つたらういつもなら、とんで出て迎へるのに、今日はどうしたんだらう。

トばあさん下手から盥をかゝへて出てくる。

ちい。ばあさん、雀はどこに行つたい？

ばあ。さあ、どこに行きましたか。

ちい。お前、たいそう怒つてやうぢやないか。

ばあ。だつて、雀はこの糊をなめたんですよ。

ちい。糊を？（糊を見て）なあんだ、ほんのひなめぢやアないか、氣をつけて見なければ、よく分らな

いほどだ。

ばあ。少しなめるのも、たくさんなめるのも、悪い心は同じです。私は腹がたつたから、追ひだしてやりました。

トばあさん、下手から盥をかゝへて出てくる。

ちい。（泣くのを止め、柴や鐵籠を下におきつゝ）さうだ、雀のあとを探しにゆかう。かあいさうだ〜。（コレから歌になる。ふしほ自分で何かつける）

舌を切られた舌切り雀

ト此の歌につれて、いろ／＼芝居をする。幕

第二幕 竹やぶ

橋を渡つて  
野をとんで  
村の外の竹籠か

雀のうちはどこにある。

ト此の歌につれて、いろ／＼芝居をする。幕

第三幕 竹やぶ

竹やぶの中のつもり、第一幕の雀の他に、一から五まで

の子雀、四と五は女の子、あと三人は男の子。みんなでチリチリ泣いてゐるところで始まる。

雀一。もう大丈夫だ。もう痛くはないだらう？

雀二。否の疵ぐらか、すぐ直るもんだよ。

雀四。ほんとよ。血も止つたから、なんでもありはしないわ。

雀五。鳴いてごらんなさいな。ためしに。

雀一。ウン、鳴いてみたまへ

雀五。それがいいわ

雀一。雀は雀同志さ。人間とは關係はないよ。

雀。でも雀にも人間にも、おとうさんも、おかあさんもありませう。だから、人間と雀は仲よく遊ぶ

のがほんとうぢやないの？

雀二。そんな事をいふから、ひどい目にあふんだ、

雀には、あんなばあさんのやうな奴はないよ。

五羽。さうだく、さうよく。

ト遠くにおぢいさんの歌が聞える。

舌を切られた舌切り雀。

舌切り雀はどう行つた。

舌を切られた舌切り雀。

雀一。ア、誰か歌を歌つて

ゐる。

雀。あれはおちいさんの聲、

まあ嬉しい。

雀二。おちいさん……あの

聲が？



野をこえて

村の外の竹籬か

竹籬か

雀のおうちはどこ

にある

雀一。君を探し むるんだ

よ。

雀二。こつちへ呼ばう。チ

ウ、チウ。

雀一。こつちへ呼ばう。チ

ウ、チウ。

つたのでどこかに死んで  
ゐるんぢやないかしら

…

五羽。チウ、チウ、こゝに

ゐますよ。チウ、チウ。

ぢい。おや、こゝにゐます

よと云つた聲がしたぞ。

誰が云つたのだらう。誰

もゐないのに…

ぢい。えつ、雀が口をきいたね。

雀一。えゝきりますとも、たゞ人間の耳には聞える

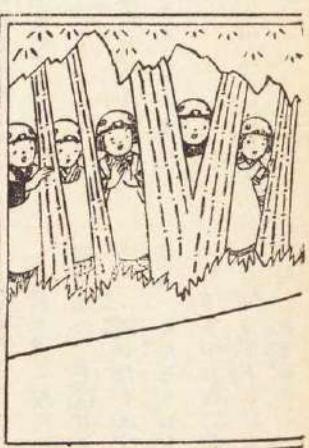
時と聞えない時があるだけですよ。

ぢい。なるほど、私は始めてだ。

雀四。雀とほんとにお友達になれば聞えるのよ。

ぢい。そんなら何よりも早速お聞きしたいことがあ

りますがね。



五羽。〔葦をそろへて〕チウ、チ

ウ、チウ。

雀三。ア、こつちを向いた、

きたく。

ト例の雀は上手に入る。

五羽だけ残る。下手から

おちいさん、杖をついて

くる。

ちい。舌を切られた舌切り

雀。

舌切り雀はどこ行つた。

五羽。チウ、チウ、チウ、

ぢい。(耳をすまし)チウ、チウと鳴いてゐる。然しほ

かの雀の聲だ。

五羽。チウ、チウ。

ぢい。あゝこんなにたくさんゐる中にも、私のたづねる子はないか、もしや舌の切りやうがひとかねますがね。

雀二。それは舌切り雀でせう。

ちい。どうしてそれが……

雀三。分りますとも。

ちい。へ……え。

雀四。おちいさんは逢ひにいらしたの?—

ちい。顔が見たくない、たまらないのですよ。舌が痛くて泣いてるでせう。

雀五。舌はちやんと直りましたわ。

ちい。直つた? ちやんと?

雀六。私たちが、お薬をつけてあげたの。

ちい。では達者に、生きてゐますねえ。

雀一。ピンピンしてら。

ちい。あ、こんなうれしいことはない。

雀一。(上手に向ひ)出できたまへ。

雀。おちいさん(ト取りすぐる)

ちい。あゝお前だ。(ト抱きあげる)

きする。

### 第三幕 おちいさんの家

幕

雀四。ね、持つてお歸りなさいよ。  
ちい。どんな物かしらないが、ありがたう、頑きませう。

雀二。私達のお家につぐらが二つあります。重いのと軽いのと、おちいさんの好きな方を上げませう。

ちい。つぐら……いや重い方には定めてレツサリ入つてゐるから重いのだらうが、このとほりの力のなくなつた年よりだから、軽い方をもらひませう。

雀一。では待つてらつしやい。

ト雀二(同上手に入る)、つづらを持つて、すぐ出でくる。

ちい。これはありがたい、ではよはせて下さい。

ドツコイシヨ、オクトドツコイシヨ。軽いと聞いてたが、どうしてなかく重い。ありがたう、では又あした。

雀二(同上手)。サヨーナラ、チウチウチウ。  
ちい。サヨーナラ。

ちいさん歩き出す。そして振返る。雀一同しきりにおじ

五羽。(ちいさんを取りまいて)さあー遊ばーくおちいさんも遊ばう。

ちい。ありがたう。(私はこの子が元のやうに直つたので、もう胸が一ぱいだ。今日はこれで歸ります。又あした、こゝにきませう(僕の雀に)歸ってばあさんによく云つてやりますよ。糊をはめるくらい、なんでもない。それに腹を立て、口をあいてお見せ。さう、お、少しも疵あとがない。直つてよかつた。ばあさんも自分が悪かつたと分るだう。さうしたら又あそびにきておくれ。(他の五羽に)みんなも一緒にきておくれ。

雀。はい、ではもうお歸りなさるのでですか?

ちい。歸りたくはないけれど忙がしいから。

雀一。そんならおちいさん、せつかくこゝにたづねて下すつたんだから、お土産をあげませう。持つて歸つて下さいな。

ちい。お土産を?

ばあさんが長いさせるで煙草をのんでゐる。

はあ。おちいさんたら、いつたい、どこに行つたんだらう。雀の家を探しにゆくんだなんて、そんなものが見つかつてたまるものですか。まだ歸つてこない。すゐぶん、のん氣なんだこと。

トおちいさん上手から、つづらをしよつて出でくる。

ちい。ばあさん、今歸つたよ。

ばあ。(ちいさんの方を見ないで)お歸りなさい(にくらしく)

雀の家は見つかりましたらうね。

ちい。見つかつたよ。

ばあ。見つかつた。(ちいさんを見て)なんです? づらをしよつてきたの?

ちい。(立つたまゝつぐらの顔をほきつゝ)雀のお土産だ。まあ話をしてから、中を開けるとしよう、くたび

れた。お茶を一ぱいおくれ。(トする)

ばあ。こんなにおそくなるで、歩きまはつてゐるか

ら、くたびれるのですよ。

ちい。だつて喜んで、なか／＼私を歸さないんだ。

あゝ然し嬉しかつた。おい、お茶をおくれ。

ばあ。ハイ、ハイ。(ト邊々立上り、下手に入りお茶を持つて

出でくる) ハイお茶。

ちい。(ゲーとうまさうにのむ)

ばあ。けれど、ほんとうにそれはもらつてきたので

すか。

ちい。ちらつたのさ。雀か

ら。

ばあ。ちやあ早くあけて見

ませう。

ちい。また話を聞き。

ばあ。話より先きに。

ちい。まあ聞きなさい。



ばあ。あけながら、お話しなさい。

ちい。さうかい。実は私も早く見たいのだ。(ト蓋を

あける。そして寶物を一つ一つ出す。二人オナオナとびつくり

しながら出す(宝物は小判のほかに、見物を一つ一つアツと云

はせるやうな奇抜なものがいい)いや、これはエライお

土産だ。

ばあ。ほんとにこれを、おちいさんに…。

ちい。ウン私の。

ばあ。ね、早く話を聞かせて下さいな。アお茶を持

つてきませう。(イソイソ下手に入り、お茶を持って出る)

ちい。(ゲーと春んで) ばーさ

ん、かはいゝもんだよ。

今まで世話になつたお禮

にと思つたんだらう、私がたづねてゆくと、よく

きた、よくきててくれたと

ばあ。なんですか? もう

一つの方とは?

ちい。ナアに、つとらは重

いのと軽いのと二つあつ

たんだ、どつちをあげや

うといふから、年よりで

力がないから軽い方をも

らつたのさ。

ばあ。アラ、ではもう一つ、これより重いつどらが

あるのですね。(ト立上りかける)

ちい。なんだい、どうしたんだい。

ばあ。せつかくもらつてくることなら、なせ重い方

を持つてこないのですよ、軽い方でさへ、こんな

に入つてぢやありませんか、重い方には、それ

こそどんなに…。

ちい。だつて、これでも私達に、勿體ないぢやない

か。

多勢の雀達が…。(おぢいさんは暗し涙をこぼして言葉が一寸つかへる) 世間の人は、一口によく鳥けものと馬鹿にするが、人間こそ鳥の真似をしなくてはならんくらゐだよ。

ばあ。(感心して) それはまあ、こんな立派なお土産をよこすほど感心な雀を、どうしてあんなにいためたのですう。

ちい。ウン、おばあさん後悔したね、雀の舌は薬をつけて直つたけれど、とにかく、おばあさんのしたことはよくないよ。

ばあ。すみません、すみません、でもコンな重いものを、よくかつてきましたねえ。

ちい。イヤこれだから、まだかつたんだ、もう一つの方をもらはなくてよかつたよ。

まあ。けれど呉れるといふのに……ようござんす。  
私が行つてもらつてきます。(ト立上る)  
ちい。(ばあさんをとめて)待ちなさい、ばあさん。お前  
さんはたつた今、悪いことをしたと後悔したちや  
ないか。後悔しても、ひどい目にあはしたことは  
向ふでも忘れはしない、お前さんが雀からつとら  
をちらはうなんて、たとへ呉れるといつても、も  
らへる道理はないぢやないか。

まあ。いゝえ、そこをはなしして、そこを。  
ちい。おばあさん、おい。

まあ。いゝつたら、私のすることは、私にまかし  
て……

ちい。おばあさん、手を擦つて下手に入る。

幕

## 第四幕 道ばた

鶯の聲が聞える。下手からおばあさん出る。

まあ。どこかこゝいらに、雀がゐませんか。  
娘。たつた今お宮の林を通つてきたらたくさんゐま  
した。  
まあ。オヤ私も、もう少し前、あそこを通つたんだ  
けど。仕方ない。戻りませう。  
ト下手から他の娘が出てくる。前の娘はすぐ上手に入  
てしまふ。

娘。いゝえ、もう雀はあそこにゐませんよ。ほかを  
はあ。おや鳥が鳴いたよ、雀からしまだ鶯が鳴く、  
ケツカツとして)鶯だ。一家を出てくる時、あんま  
り忙いだもんだから、雀のゐる所を、ちいさんに  
聞くのを忘れてしまつた。と云つ。今さら引つ返  
すのもいやだし……まあつとらをもらふことを思  
へばなんでもない。

ト下手かる娘が一人くる。小さな子供。

ばあ。一寸。

娘。なアに。

まあ。どこかこゝいらに、雀がゐませんか。

娘。たつた今お宮の林を通つてきたらたくさんゐま  
した。

まあ。オヤ私も、もう少し前、あそこを通つたんだ  
けど。仕方ない。戻りませう。  
ト下手から他の娘が出てくる。前の娘はすぐ上手に入  
てしまふ。

娘。いゝえ、もう雀はあそこにゐませんよ。ほかを

探してごらんなさい。(ト言ひつ上手に入る)  
ばあ。どつちがほんとうだらう。(ト考へる)

ト上手から小さな男の子が、モチ竿を持って出てくる。

ばあ。お前そのモチで雀を取るのぢやないの?

男の子。ええ。

ばあ。雀はどこにあるの?

男の子。僕はよく知つてゐるよ、けれどだれにも云は

ないんだ。人に取られるといやだもの。

ばあ。そんなことを云はないで。

男の子。アカンベエ。(ト云ひ、下手に走つて入る)

ばあ。いやな奴だ。(ト雲雀が鳴く)ア、雀ぢやないか

しら(まだ鳴く)雲雀……人をバカにして、あしさつ

きから迷つてばかり……おまけに道でない所を、

歩いたので、足も着物も泥だらけだ。(大のほえる聲)

上手を見て)おや、私を見て犬がほえるにくら

い(又、犬の聲)アラ、こつちへくる、あゝこはい  
こはい(犬の聲)アラ、こつちへくる、あゝこはい

はあ。私がこゝにくるまでに、どんなに道を迷つた  
かしれやしない。これごらん。着物の裾が泥だら

## 第五幕 竹やぶ

幕

例の雀と五羽の雀が、ばあさんと話してゐる。  
まあ。私がこゝにくるまでに、どんなに道を迷つた  
かしれやしない。これごらん。着物の裾が泥だら

けで、袖もこんなに綻びてるだらう。みんな竹山

どのほつたり、田園の中を歩いたりしたからだ  
よ。そんなにまで一生けんめいにたづねてきたん  
だもの。ありがたいと思つて下さいよ。

雀一。ほんとうにご深切だ。

はあ。だからね、せつかくたづねてきたりしたしに、  
そら、あのおちいさんがもつたやうな葛籠をね  
アレを一つ私に下さいよ。

おちいさんは弱蟲だけれど、私は力があるから、

もつと重くても持てるよ。

雀二。おや、あの重いのを

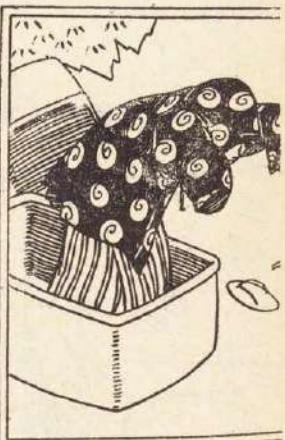
あげやうか。

雀三。え、その方がいいと

いふんだから。

雀一。すぐ持つてくるよ。

ト五羽の雀は上手に入る。



五羽の雀トトロの雀例の雀トトロの雀も上手に入れる。ばあさんは  
つゞらなかつがうとし  
て重くて立てぬ。  
ト立上り 石のや  
うに重い、一丁だつて  
歩けやしない。でも、そ  
れだけドツサリ入つて  
ゐるんだよ、ウントコ

五羽の雀トトロの雀例の雀トトロの雀も上

はあ。(例の雀に) お前、またチヨイ／＼家へおいでよ  
今度から糊はたくさんなめさせてあげるから。い  
や明日、私がこしに持つてきてあげよう。

ト五羽の雀つづり持つて上手から出る。

一

はあ。(例の雀に) お前、またチヨイ／＼家へおいでよ  
ばあ。アラ、すゐぶん重さうねえ。けつこう／＼、  
これさへもらへばもうたさん。へえサヨナラ。

雀一同。サヨナラ。

はあ。(例の雀に) お前、またチヨイ／＼家へおいでよ

ばあ。おちいさんがあく

おちいさんはくさう

ちい。 ウントコ

ト五羽の雀トトロの雀例の雀トトロの雀も上手に入る。

(幕)

一二九

# つまらない

野口雨情

梟が啼くから

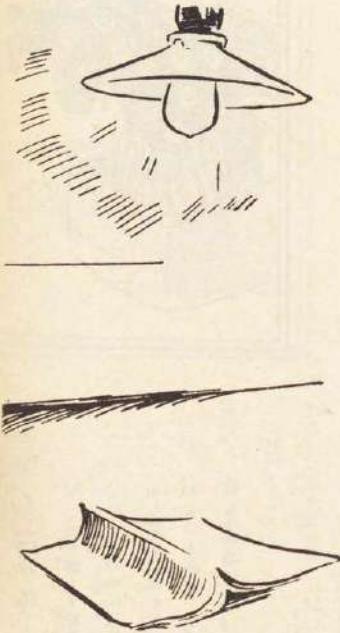
夜になる

ホー ホー ホー

電気が暗くて

つまらない

御本を読むにも



読まれない

梟は暗くも

目が見える

ホー ホー ホー

わたしは暗くちや

目が見えぬ

お針も出来ない

つまらない



## 概梗の(てま號前篇)

小鳥は空に 義雄の父親はすつと以前に亡くなつて、今ではお母さんと女中のお美津との三人きりで、京都に住んで居りました。父親と云ふのは書家で、有名な岩村伯爵の三男でしたが、義雄のお母さんの信子と結婚する時、信子が幸い櫛木屋の娘だと云ふので、頑固な伯爵の怒りに触れて遂に東京に居られなくなり、京都へ来て住む事になつたのです。所が伯爵家では後嗣にならう者がないので、今度改めて義雄少年を世嗣として迎へる事にしました。併し頑固な伯爵は、母親の信子だけは身分の卑しい者だから、家に入れる譯には行かないと言ふのです。従つて二人は上京してからも、離れになつて、母親は別邸に住む事になりました。やがて義雄少年が、初めて伯爵に會ふ日が來ました。伯爵は義雄の心を試めして見やうと思つて、タマリと云ふ亂暴な飼犬を駆かけ、義雄に向はせました。所が義雄は一向平氣なばかりか、タマリもまた義雄になつて、尾を振りながら嬉しさうに傍へ近寄つて来ました。伯爵はたいへんこの義雄が氣に入りました。

名曲「嘆きの蓄音」 十年前に死んだ逸雄の父市田四郎は世界的なヴァオリソの名手でした。父の作った名曲「嘆きの蓄音」を今も完全に奏するのは、父の遺品の九官鳥「珊瑚」だけなのです。が、その珊瑚は何者かに奪はれました。その時突然現れたのは十年前行方不明になつたといふ兄の芳雄でした。芳雄が珊瑚を盗んだのだと知つた時、逸雄は兄弟の情から彼を許して共に住んでみると、芳雄から珊瑚の行方を探しに支那人張の家のへ行かうと言はれたので、行つて見ると逸雄は我かに囚はれ、今迄忠儀と信じてゐた河野が全てを指圖してゐる事を知づきました。様々の困難を経て逸雄が張の家を逃れて歸ると、邸は既に人手に渡つてゐました。偶然探偵の源田に會ひ、東京の帝國座と帝國演藝場で「嘆きの蓄音」の公演のある事を知りました。一つは父の弟子の小畑、他の一つは芳雄が出演するのです。逸雄は探偵と共に上京して、探偵の知り合ひのフタバ屋と云ふ蓄音機商の所へ泊りました。逸雄は其處で、市田四郎の名前で吹込んである「嘆きの蓄音」のレコードを聞いて、大へん不思議に思ひました。そのレコードは、亞細亞蓄音機會社から出たものでした。夕方になると逸雄は帝國座へ小畑の演奏を聞に行きました。七年前には本當に下手だった小畑が、今度は素晴らしく上手になつてゐます。逸雄はうつとりとして聞き惚れました。やがて帝國演藝場へ、芳雄の演奏を行つた探偵が駆けて来ましたが、その話によると、演奏者の市田芳雄と云ふのは、兄の芳雄とはそつくりと又違つた少年だと云ふのです。逸雄は驚いてしまひました。

## 懸賞募集

### 各地に傳へられたる歴史童話

日本全國の各地には、いろいろの面白い歴史に關係ある話が傳へられてゐます。たゞの傳説でなく、歴史に結びついてゐる興味あるお話を求めます。左の規定に従つて、奮つて御寄稿下さい。

#### 原稿枚數

一篇二十字詰二十行原稿紙十二枚限り

#### 賞金

(一等(一篇) 金貳拾圓。貳等(二篇) 金拾圓。  
(三等(三篇) 金五圓。)

金の星編輯部選。

#### 發締切

六月廿日。

#### 表

九月號。



方 繩  
藤齋 佐選郎 次

叔母さんの家（賞）

佐賀縣佐賀郡川上村川上校跡四

田代久子

お母さんの手に引かれて、やつと丘の上にのぼりました。草は皆

霜のために黄色になつて、冷たい風に悲しさうにゆれてゐます。

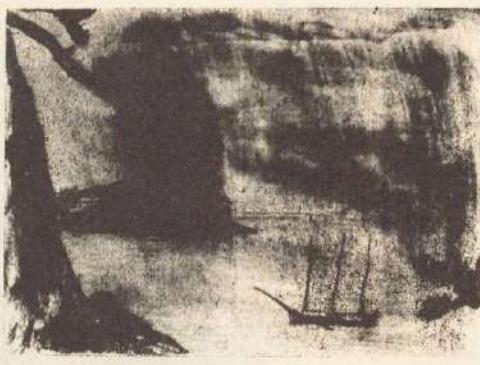
「もうすぐだよ」お母さんはさう言つて、黒いショールをつくろひ乍ら、私をごらんになりました。

見渡すと、白い川が美しく流れ、その向ふに一つの村があります。川の水がキラ／＼といくつた。

お母さんの手に引かれて、やつと丘の上にのぼりました。草は皆

霜のために黄色になつて、冷たい風に悲しさうにゆれてゐます。

た。私の目にはいつのまにか涙がほろほろ出て、しづく／＼と泣きたくなつた。お母さんは火をたきつけておいて、「こゝへ来なけれ



「風景」（賞）

廣島縣御手洗町尋六

加藤 守二

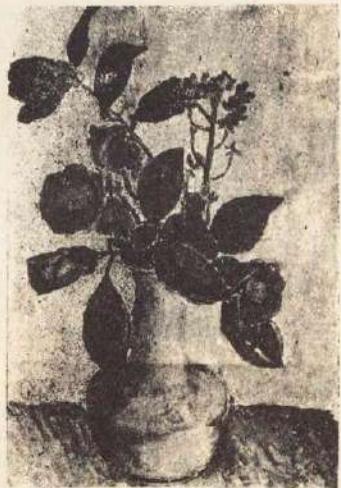
亞米利加より日本へ（賞）  
長野縣下伊那郡龍丘校跡三  
下平博

僕は亞米利加で生れました。大正十年十月の或日曜日の十時半頃に、トランクやカウリ等を自動車に乗せて、オーバーランドへ着きました。汽船がもう少しで出るところであつたので、あわてて自動車からおりて、きつぶを買って汽船に乗つて、サンフランシスコへ着きました。僕達の乗る汽船を見た時、赤い字で天洋丸と書いてあります。日

は、火事になるよ」とするとく言つて、又裏山へと行かれた。私はおそろしくなつて、しづく／＼となつて居た。私は朝からなんだか心さびしかつた。學校に來て友だちと一緒に、ふとんの下にもぐりこんで、ねこんでしまつた。

その日は空がどんよりと曇つて、雪さへも降らうかと思はれて居た。私は朝からなんだか心さびしかつた。學校に來て友だちと一緒に、ふとんの下にもぐりこんで、ねこんでしまつた。お母さんは、どうぞ云つた。お母さんは裏山からさつさと歸へられて、「たれがおいでたのか」とおつしやつたので、「うそを云つたのよ、火をたいて下さい」と云つたら、お母さんは、はりの様な目をして「もう今からあんなうそを云つてはきかないよ。學校でうそを云へとなつたのか」とお母さんに叱かれ

ました。汽船がしづかにみなとをはなれると、赤や青などのピラをはりました。僕も船員にもらつてなげました。ひら／＼と波の上へ雪のやうにかるく落ちます。サンフランシスコの港が見えぬやうになると、皆しそくだうへ行つて晝飯をたべてしまつて、四方の景色を見てゐました。どちらを見てても海ばかりの所へ來ました。これから船の中で遊んでくらすのです。六日目の朝五時頃におこされました。急いで顔をあらひ朝飯をたべてしまつた時は六時頃であります。どうしてこんなに早くしたくをしたでせう。此朝はホノルルと言ふ町へつきました。此の町は島の町であります。此の島は雪の降る事はありません。十月も七月ぐらゐのあつさであります。日



石川大分(賞)「花の春初」

半分にあつちで  
もこつちでも十  
銭五銭となげて  
ゐます。金を拾  
ふと手を高く上  
げて、何か大ご  
ゑで言つてゐま  
す。僕もおもし  
ろくて見てゐま  
した。汽船がき  
らはれてホノルルも見えなく  
なりました。船の中ではすまふを  
とりました。しばるもしました。

本人も大せいをります。島へ汽船  
が着くと、自動車に乗つてホノル  
ルの町を見物しました。へんな色  
のさかなや、へんな形のさかなを  
見ました。それをしやしんにとつ  
たのを日本のみやげにしました。

夕方汽船に乗ると、ホノルルの土  
人が水の中へ入つて、手を上げて  
何か大ごゑで言ふと、金でもくれ  
と言つたのでせう、皆がおもしろ  
いと見ました。それをしやしんにとつ  
たのを日本のみやげにしました。

表通りに近いえんさきを前にし  
て、机に向つてゐますと『市村さ  
ん』といきなり言葉をかけたもの  
がありました。はつと頭を上げる  
と、其所にはえび色のマントにつ  
つまれた秋山さんにこゝへした  
姿が、見えるではありませんか。



木と雀

私は一日見たきり、何と言つて  
よいか言葉が口まで出てきて、言  
へさうで言へませんでした。秋山  
のまま家を出て

さんも、につこりとした顔にな  
つかしさうな目をかがやかせて、  
ただ私を見てゐるばかりでした。  
其のいちらしい姿を、目の前に見  
れば見るほど、もうたまらなくな  
つてしまふ。「口がかたくなりま  
した。すると秋山さんは、「三学期か  
ら学校に行くから、これから遊び  
に来ない」とやさしい聲で顔をう  
つむけながら言つたと思ふと、其  
のまま家を出て

行きました。それでも私には何  
とも言へませんでした。そして  
秋山さん後姿を、いつまで見送つて  
ゐるばかりでした。あ、あん  
んな重い病氣がついたのだらう。

### 秋山さんがあつた日

茨城縣結城郡水海道校尋四

市 村 き よ

ちやうど其の日は、一月のお休  
みも、のこり少くなつた午後の日  
の事でした。(もりがちのさむ空  
には、雲が一ぱいにかさなつてゐ  
ました。宿題をかたづけようと、



男正江 静岡に行く兄さん

東京牛込校尋五波多市町福上岡藏  
成富妙子

さう思ふと、その重い病気がなくてにくくなりませんでした。それでも、いつかきれいなふとんにくるまれて、やすんでゐた秋山さんはまるでちがつた、あんなにころこばれました。其の中に灰色の空からはとうとい雨がふり出して来ました。私はいやな氣持で机

よの部屋でねむり、一しょの部屋でおさらひをして暮らして居たお兄さんが、試験を受ける爲に静岡へおたちになりました。お兄様は無口で勉強すきであつしやいました。そしていつも無言のまゝ考へて居た方が多い方でした。私は入學試験前でおいそがしいと云ふことゝしりながらいつも困らして居ました。今考へて見ると、悪い

ことをかたして、おさうぢをはじめました。

「まべました。

静岡に行

く兄さん

正十四年三月十六日の七時を時計がはうじた時、お兄さんはお姉さんに見送られてこの家からおさりになりました。私は何んだか急にさびしくなつてしまひました。お兄さんから文ふだといふ手紙が來

ことをしたと心にとがめられてなりません。かうしてお兄さんは、自由に勉強することができずにして、すみなれたこの家をあとにしました。私たちはお兄さんにさいました。私たちもお兄さんには少しお知りになりませんでした。私はおよろこびになれました。私はおよろこびになんでし。私はおよろこびになる顔が見たうございましたが、食堂へ行つた時、お兄さんはもうめし上つたあとで御座いました。大正十四年三月十六日の七時を時計がはうじた時、お兄さんはお姉さんに見送られてこの家からおさりになりました。私は何んだか急にさびしくなつてしまひました。お兄さんから文ふだといふ手紙が來

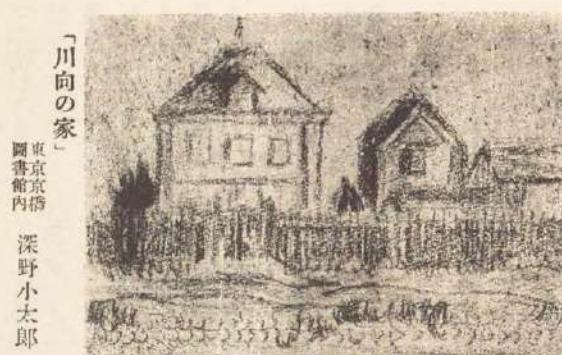
ましたが、受けたかどうかと心配でなりません。もし受けらなかつたら、私たちのせゐと云はれても仕方がありません。さん

ざじやまをしたのですから。何しろがふかくいたします様に。

### 芋掘り

横須賀市沙入六

茶木七郎



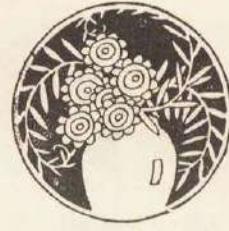
「川向の家」

東京京橋  
圖書館内 深野小太郎

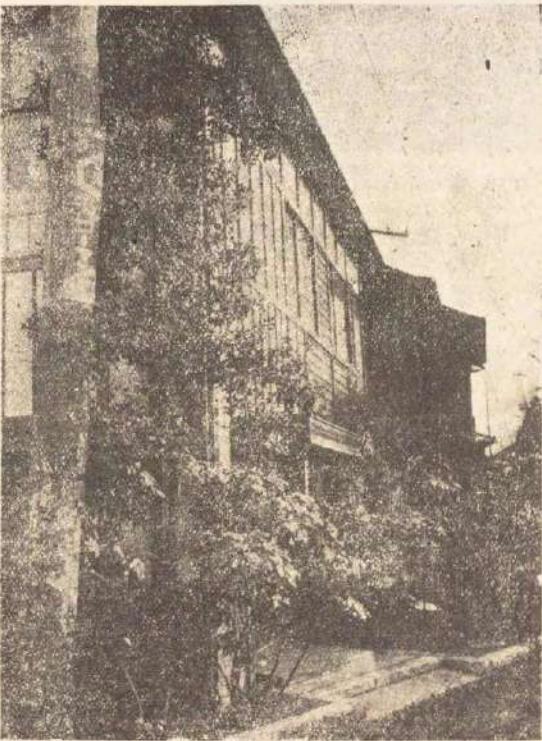
「七ちゃん芋掘に行かう」と隣のおちさんが呼びに来たので、すぐ裏の小屋に行き芋掘をかついて表に出た。おちさんも芋掘をかついて居る。源さんの山「うん」やがて芋のある邊にきた。「七ちゃんを採がさう」と云つて、おちさんは芋はりを地に置きがけの方へ下りて行つた。僕も下りて行つた。

少しの間は一生懸命になつて掘つて居たが、めつからないのでおちさんはどの邊に居るかと思つて、下の方を見ると、もう「ぼすく」と掘つて居るらしい。おちさんがなんだかぶつく云





自由畫選譜



面側社本

△加藤守三君の風景畫（入賞首席）——は伊那がい。右から船の頭へ。出た船のかたまりが大きいへん利いて居ます。船の松のむわくなるよ。此處へ紫のタレヨシノを用ひない方がよくなかった。左の松の大木はちとまづい。空や遠景はいゝ。

△矢田季吉君の「初春の花」（入賞次席）注意深し。氣を静かに描いた繪だから全體に見こなすたへがあります。少し色がちどむさいが、色の質は決して惡くない。たゞバラクの紫色はなま／＼して他と不調和です。

△三輪利夫君の「木と雀」（入選一席）——は可愛らし繪だ。とり入れ方もしと描きぶりも藍くない。雀は雀らしくありません。

△波多江正男君の「ばまべ」(入選二席)  
はよくかけて居るが、少一弱いですね。遠い  
島と海を感じよく表れて居ます。

△深野小太郎君の「川向の家」(入選三席)  
感じのいい繪ですが少し弱い。それがな、最初  
りんくわくのあたりをつけた時、黄色のクリ

イヨンな使ふのはいけませんね。此處ではやはり、普通の黒い鉛筆を軽く用ひるか、アリヨーのヨーロッパンを用ひるかです。

△岩谷手錠君の「人形」(入選四席)——は人形の姿勢がよく出て居るし、はつきりした繪です。(十四年四月)

イヨンを使ふのはいけませんね。此繪ではやはり、普通の黒い鉛筆を軽く用ひるか、アトミーのクレイヨンを用ひるがです。  
△岩谷手彌翁の「人形」(入選四席)——は人形の姿勢がよく出て居るし、はつきりした繪です。(十四年四月)

幼年詩選評

若山牧水

著者　山　先　方

るとおもふ。これらの歌のそれも、の中に。私は誠に満りのない子供たちを見出したい。清らかで、聰明な子供たちが並んでて、異常に非常に嬉しい。明るい瞳、明るい心、それが私の瞳私の心

先頃、仕事擴張のため、營業所を市内動坂町三五九番地へ移轉いたしましたが、社の新築が全部完成いたしましたので、本社も同所へ移ることになりました。今度は、全部の仕事を同所で扱ひます。

本社移轉お知らせ

先頃、仕事擴張のため、營業所を市内動坂町三五九番地へ移転いたしましたが、社の新築が全部完成いたしましたので、本社も同所へ移ることになりました。今度は、全部の仕事を同所で扱ひます。

東京本郷駒込町三五九

金の星社

面 正 社 本

A black and white photograph of a long, two-story wooden building, likely a residence or a public building from the early 20th century. The building has a gabled roof and a prominent front porch supported by several columns. Numerous windows with wooden shutters are visible along the facade. The structure appears to be made of light-colored wood. In the foreground, there is a dirt path or road leading towards the building, and some sparse vegetation and trees are visible in the background under a clear sky.

今本社は別に宣傳費の通り移轉いたしまして、非常に處の處で市内ではあります、廣くもあつて、非常に處の處で、高臺で、から向うの田畠を  
臺を見晴すと、春が一層美しく見えます、青葉が美しく日によりかゝやいてある中に、花  
が咲いてゐます。  
△本社がます！　擧えて行くことは喜びにた  
へません。しかし、これと申すも、皆様のお  
力添への結果でありますから、今後は、層元  
氣を出して、立派な雑誌を出す爲めに努力い  
たします。

自由譜掲載外佳作

駿二(東

京

小林

茂樹(山

鮮)

梨)

下川

勝(福

岡

伊藤

美緒(岐

阜

原

利夫(岐

阜)

利三(秋

田)

岩谷

貞三(秋

田)

飯野

恵美(京

都)

河野

洗朝

鮮)

大山

忠雄(不

明)

佐藤

綱(北海

道)

中西

文宣(長

野)

岩谷

ヤシヨ

秋

田)

斎藤

まさ(山

形)

矢田

季吉(大

分)

手島

昇(鳥

取)

酒谷

元(廣

島)

江河

二郎(靜

岡)

大家要

一郎(和

歌山)

三井

善治(千

葉)

高田

縣治(北

海道)

若松

桂市(岐

阜)

石川保

太郎(千

葉)

西岡

一夫(和

歌山)

横井

修吉(京

都)

磯田

悌作(山

形)

平井

九(香

川)

高松

貫(香

川)

長谷川

千春(山

形)

吉田

シヅカ(福

岡)

鷗

多田

正雄(香

川)

山川

源市(山

形)

熊谷

笑春(滋

賀)

岩谷

眞三(秋

山)

眞

金子

多代(東

京)

小山

豊(山

形)

石川

弘(香

川)

山岸

中尾

喜久(安

城)

前田

敏男(石

川)

横井

靜(大

鮮)

逸見

宇市(堺

玉)

村谷

貞三(秋

田)

岩谷

幸(福)

岡

古賀

文子(福

岡)

満田

秀雄(不

明)

河野

正三郎(朝

鮮)

中村

クリエ(福

岡)

稻住

保利(東

京)

上田

一美(島

根)

山口

日出(東

京)

山本

新造(移

木)

松本

恵松(高

須)

大坂

良一(東

京)

松子

山(山)

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日

日





# 著名の行社發星の金

武井武雄  
先生著

ブウ太郎鍛冶屋

(繪入童話集)

三宅房子  
先生譯

家なき子

(長篇名作)

野口雨情  
先生著

青い眼の人形

(童謡集)

小島政二  
郎先生譯

狼少年

(長篇物語)

郎先生著

森の祈り

(長篇物語)

武井武雄  
先生著  
獨特の生の童話と  
その他のもので、  
児童の生涯であらわら不思  
議な運命に生れて、遂に旅  
者に賣られ、旅から旅へ  
歩く裏の話など、實に面白  
い話などがある。

原作は佛國文豪マーローの作に  
なり、孤兒の生涯であるが、その  
旅に運命に生れて、遂に旅者に賣  
られ、旅から旅へ歩く裏の話など、  
實に面白い話などがある。

今大有野口雨情の筆による本  
冊は、大有野口雨情の筆による本  
冊である。大有野口雨情の筆によ  
る本冊は、大有野口雨情の筆によ  
る本冊である。

印度の自然の中で狼に育てられ  
て成人した少年を主人公にして、  
熱帯の森林の中で猛獸と共に生  
活する少年の冒險を描いた物語。  
原作は、大有野口雨情の筆による本  
冊である。

本作は、大有野口雨情の筆による本  
冊である。大有野口雨情の筆による本  
冊である。

四六判箱入美本

外市京東端一五三

四六判箱入美本

市京東端一五三

四六判箱入美本

市京東端一五三

四六判箱入美本

市京東端一五三

四六判箱入美本

市京東端一五三

本文三〇〇頁  
定價金壹圓六拾錢  
送料金拾貳錢

市京東端一五三

# 懸賞創作募集

自由画 山本 鼎先生選  
詩 若山牧水先生選  
綴方 編輯部選

[意]注

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたりしたことや  
してかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學  
校や学年(または住所と年齢)とともにお書きください。用紙は自由画はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙  
(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」等の賞品を差上げます。次號(次号)は五月廿八日(その後は次號へ廻る)  
発表は八月號、宛名は東京市本郷區動坂町三五九番地金の星社。

童謡 野口雨情先生選  
話 薩藤佐次郎先生選  
詩 薩藤佐次郎先生選

童謡は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、詩なり、文なりに  
よたは「特選」として発表いたします。童話には五圖づつ、特選の場合には童話には拾図、童謡には五圖づつ、特選の場合には「金  
の星」等の賞品を呈します。但し少年少女の創作童話にして、金の星  
の星には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

一五〇

定價壹冊金四拾錢 送料壹圓二拾錢  
半年分六冊送料共貳圓四十錢  
一年分十三冊送料共四圓八十錢

〔意〕注  
△御註文は必ず前企で御拂込み下さい  
△送金は振替が一番便利で御座います  
△切手代用は「壹圓切手」一割増しです  
△第何巻第何號よりと書いてください  
△住所姓名ははつきり書いてください  
△お拂込み下さい

振替口座東京五九五六番

〔意〕注  
△御註文は必ず前企で御拂込み下さい  
△送金は振替が一番便利で御座います  
△切手代用は「壹圓切手」一割増しです  
△第何巻第何號よりと書いてください  
△住所姓名ははつきり書いてください  
△お拂込み下さい

〔意〕注  
△御註文は必ず前企で御拂込み下さい  
△送金は振替が一番便利で御座います  
△切手代用は「壹圓切手」一割増しです  
△第何巻第何號よりと書いてください  
△住所姓名ははつきり書いてください  
△お拂込み下さい

〔意〕注  
△御註文は必ず前企で御拂込み下さい  
△送金は振替が一番便利で御座います  
△切手代用は「壹圓切手」一割増しです  
△第何巻第何號よりと書いてください  
△住所姓名ははつきり書いてください  
△お拂込み下さい

大正十四年五月九日印刷納本(毎月一回)  
編輯兼發行人 薩藤佐次郎  
印刷所 東京市本郷區動坂町三五九  
上村新輔  
東京市小石川久保町八番地  
株式博文館印刷所

まる出版複刻版'83

# 新製品

## ライオン歯磨

(粉製)

きれいな、きれいな

『丸罐入』が出来ました。

薄淡紅色と紫紺色、

ほんとに可愛らしい

『丸罐入』が出来ました。



▼定價金拾六錢